

聖隷クリストファー大学

Community-Based Practice and  
Research Center for Health and Welfare

# 保健福祉実践開発研究センター 年 報

地域貢献事業研究 報告書

第8号  
2016



聖隷クリストファー大学

保健福祉実践開発研究センター



## ごあいさつ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター年報第8号(2016)の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

当センターの活動は、2017年度現在で9年目に入っており、この年報では2016年度の実績を報告しております。

地域の実践現場と共同で行う研究に重点を置き、その研究成果を地域へ還元することを目的にした2016年度の地域貢献事業研究費の採択数は4件でした。詳しくは35ページからの報告書をご覧ください。また、研究成果の報告会は例年11月に行われます聖灯祭・ホームカミングデー同日にポスター形式で行っており、地域の皆様や卒業生にご覧いただくと共に、採択された研究代表者によるプレゼンテーションも行います。

公開講座につきましては、時勢やニーズに合ったテーマ設定をし、2016年度は専門職向けの公開セミナーを2回、一般の方向けの市民公開講座を2回実施しました。公開セミナー及び市民公開講座では高名な講師をお招きし、ご講演をお願いするとともに、テーマによっては本学教員も講師として登壇し、日ごろの研究成果等を地域へ還元いたしました。今後も引き続き、専門職向け、一般の方向けともに皆様のニーズに応えられる講座を開催していきます。

地域の専門団体、病院や施設、行政から当センターへの講師や委員等の派遣依頼は年々増加しており、地域で果たす本学の役割を拡大することにつながり、大変喜ばしいことと感じています。教員が講師として派遣依頼に応じた実績は、ホームページでも公開しています。講師等の派遣につきましては、保健福祉実践開発研究センター事務局にお問い合わせください。

2016年度は「政策形成への関与」といたしまして、自治体の専門委員や審議会委員を受託している教員が中心となり、学内サロンを開催いたしました。また、自治体の担当部局と今後の官学連携のあり方について意見交換を行いました。

聖隷クリストファー大学は、保健医療福祉の未来を創造する、教育・研究・実践のフロンティア大学として「未来創造躍進プラン」を定め、地域連携に関する2017～2021年度までの中期目標を「人々の幸福と健康及び地域の保健医療福祉の発展に貢献するため、地域の保健医療福祉の基幹大学としての自治体等の地域社会・施設等との連携体制を作り、地域での教育・研究・実践を推進する」とし、2017年度当センターは、1)「(仮)聖隷クリストファー保健医療福祉市民大学」開講準備 2)自治体政策会議への参画準備 3)東京パラリンピックへの参画の検討 を重点計画として取り組んでおります。

これからも保健福祉実践開発研究センターは、地域の皆様から必要とされ、“地域と歩む”実践・研究・地域連携を続けて参る所存です。皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2017年11月

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター  
センター長 大場 義貴



## 目 次

### I. 2016 年度事業報告

1. 地域貢献事業研究 課題一覧	1
2. 公開セミナー・公開講座	4
3. 研修会講師等派遣	10
4. 保健医療福祉団体の委員等派遣	18
5. 研究支援	21
6. 資 料	22

II. 2016 年度地域貢献事業研究 報告書	35
-------------------------	----

保健福祉実践開発研究センター運営会議 委員一覧



# 1. 地域貢献事業研究 課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2016年度は計5件(区分A:3件、区分B:2件)、計1,534,499円の申請があり、保健福祉実践開発研究センターによる審査の結果、4件の課題を採択し、計846,753円の事業研究費を配分しました。研究課題4件の報告書を当年報(P.37～)に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

(区分)

A: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

所属 <sup>※1</sup>	研究代表者	職位 <sup>※2</sup>	区分	研究課題	対象地域	配分額(円)
看護	炭谷正太郎	助教	A	ベッドサイドの環境デザインの改善 ～患者の入院生活の質を高める廊下の距離表示作成～	総合病院 聖隷三方原病院 高度救命救急センター	150,000
リハ OT	田島明子	准教授	A	小学生を想定したわかりやすいDET (Disability Equality Training: 障害平等研修) のプログラム開発	浜松市	248,553
看護	若杉早苗	助教	B	自治体と連携した危機管理体制の構築 -災害時に住民同士が救護活動を主体的に行っていくための地域づくり-	牧之原市	284,452
リハ PT	金原一宏	准教授	B	部活動を実施する高校生の心と身体を支えるサポート体制の構築に関する研究	浜松市、 豊橋市	163,748
合計						846,753

※1 看護=看護学部、リハ=リハビリテーション学部、PT=理学療法学科、OT=作業療法学科

※2 2016年度時点の職位

## <地域貢献事業研究 報告会>

2015年度に地域貢献事業研究費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました。

日時: 2016年11月5日(土) 10:00～15:00 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催

場所: 聖隷クリストファー大学1号館2階 1222・1223 演習室

発表: ポスター発表および口頭発表 来場者数: 102名

## 2016 年度「地域貢献事業研究費」の募集について

保健福祉実践開発研究センター「地域貢献事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

### 1. 基本方針

保健福祉実践開発研究センターの柱のひとつである「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同研究事業」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象とした事業研究費を募集します。

### 2. 対象となる研究および事業研究費の金額

本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、

A：地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B：地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

- ・実習先・就職先施設等と連携した研究であればなお望ましい。
- ・研究費の配分総額は130万円、1件当たり最大40万円です（共同研究費とは上限額が異なります）。なお、地域貢献事業研究費の総額は、並行して募集する共同研究費の申請状況も考慮し、大学全体の研究費予算の枠内で柔軟に対応していきます。
- （配分総額は、2016年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります）

### 3. 研究対象期間

2016年4月1日～2017年3月31日

### 4. スケジュール

募集告知	1月13日(水)
研究計画の受付	2月15日(月)～3月14日(月)17時まで
保健福祉実践開発研究センター運営会議開催 (申請状況の報告/審査要領の確認)	3月23日(水)
審査期間	
保健福祉実践開発研究センター運営会議開催〈必要があれば臨時で〉 (要領等を大きく逸脱した申請課題があった場合の対応の検討)	4月4日(月)～4月13日(水)
保健福祉実践開発研究センター運営会議開催(配分案の検討)	4月20日(水)～4月26日(火)
部長会で配分案決定	5月10日(火)
配分結果通知、執行開始	5月11日(水)
執行役員会に配分結果を報告	5月20日(金)

### 5. 申請期限

3月14日(月)17時

- ・研究計画書は、必ず保健福祉実践開発研究センターメールアドレス「health-science@seirei.ac.jp」へメールでご提出ください。15日(火)以降は、原則として提出データの修正・差し替えはできません。
- ・迷惑メール自動振分機能等による受付け漏れを防ぐため、メール受信の翌日中(土・日曜、祝祭日を挟む場合はその翌日)に受付け完了のメールを返信します。返信がない場合には総務部担当者(諏訪部、黒田、田中)へご連絡ください。



## 6. 申請における注意事項

- ・申請できる経費等の詳細は、「共同研究費取り扱い要領」の「7. 申請できる経費」に準じますのでご確認ください。取り扱い要領に定められた内容に違反した場合は配分対象にならない場合がありますのでご注意ください。
- ・配分された研究費の執行は、部長会で配分案が決定し、配分結果を通知した後からとなります。通知前の執行は認められませんのでご注意ください。
- ・研究計画書の経費内訳欄には、できるだけ具体的な積算根拠を記載してください。算出根拠の未記入等、記載内容に不備があった場合は、該当経費は配分対象にならないことがあります。
- ・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。
- ・研究組織については、共同研究費取り扱い要領の「6. 研究組織」を参照の上、研究代表者が研究分担者および研究協力者と相互に確認をした後、研究計画書の該当欄に記載をしてください。また、研究計画書については代表者、研究分担者および研究協力者の合意のもと提出してください。

## 7. 審査の方法

保健福祉実践開発研究センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします（A・Bそれぞれ15点満点。絶対評価）。

項目	A	B
(1-A) 本学周辺地域の保健医療福祉の向上にどのように貢献できるか <5点満点>	○	—
(1-B) 本件が地域との基盤作り等である場合の将来展望 <5点満点>	—	○
(2) 研究計画・方法の妥当性 <5点満点>	○	○
(3) 申請経費の妥当性 <5点満点>	○	○

## 8. 研究成果の提出

- ・研究代表者は、研究期間内における研究課題の成果を取りまとめ、次の2種について2017年6月末日までに保健福祉実践開発研究センターに提出してください。
  - ①研究成果報告書（A4版サイズ、3～4枚程度／保健福祉実践開発研究センター年報等に掲載）
  - ②一般向けの抄録（A4版サイズ、1枚／保健福祉実践開発研究センターHP等に掲載）
- ・研究代表者は、保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

### ※関連書類

- ①聖隷クリストファー大学共同研究費取り扱い要領【参考】
- ②2016年度 地域貢献事業研究費 研究計画書

## 2. 公開セミナー・公開講座

当センターでは、専門職向けの講座を「公開セミナー」、一般の方向けの講座を「市民公開講座」として毎年度開催しています。公開セミナーは保健医療福祉の専門職からの要望が高いテーマをとりあげ、公開講座は時勢やニーズに合わせたテーマを年度ごとに設定しています。2016年度公開講座は地域の専門職の関心が高い「モチベーション」「障がい者の就労支援」および一般市民が参加しやすい「認知症」「障がいを持つ子どもの育ち」をテーマに実施しました。

### 1 公開セミナー① モチベーションに関する公開セミナー

#### 1. 概要

タイトル：『働くモチベーションを生み出すチームづくり～仕事上手は「ほめニュケーション上手」～』

日時：2016年6月25日(土) 13時30分～15時30分

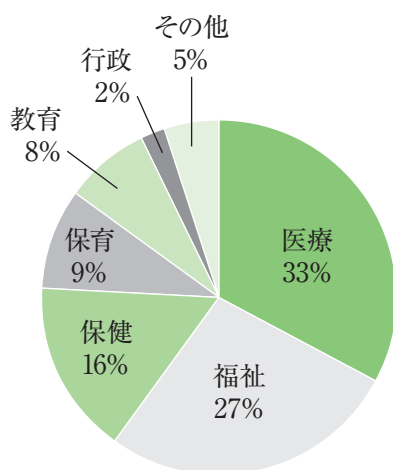
講師：高橋佐和子、伊藤純子（ともに聖隷クリストファー大学看護学部助教）

対象：保健医療福祉の専門職者他

参加者：定員60名 参加87名

アンケート回収：80件

#### 2. 参加者職業内訳(合計87名)



医療(29名)：看護師、理学療法士、作業療法士、保健師、看護教員など

福祉(23名)：介護支援専門員、介護職、福祉施設長など

保健(14名)、保育(8名)、教育(7名)、行政(2名)、その他(4名)

### 3. アンケート結果

#### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「日頃から職場でのチーム作り、職員育成が難しいと感じているため」「職場でリーダーをしていて新人教育に悩んでいるため」「組織の中でうまくいかない事があり何かヒントになればと思ったため」など、日常の仕事の中で抱えている悩みを解決するためのヒントを求めて参加した方、また「チーム作りのために役立つほめ方を学びたかった」「ほめるのが苦手なので、ほめるポイントを知りたかった」など、「ほめる」というキーワードに興味を持ち参加された方が大半を占めました。

#### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

87%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答しました。理由としては、「ほめるコツやチーム力を高める方法を知ることができた」「部下との適切な距離感や、ほめるプロセスを学び、職場で活かせる内容があった」「自分の特徴を知り、良いチームづくりを目指す上での気づきを得ることができた」など、セミナー内容に関して、前向きなコメントをいただきました。一方で、「グループワークを通してチーム作りのポイントは理解できたが、職場に戻って達成できるかは疑問」と、今後の課題を感じた方もいたようです。

#### 設問 4 今回の講座の感想

大多数の方から「とても楽しく参加できた」「楽しみながら学ぶことができとても充実した研修だった」「楽しい雰囲気の中で、内容が分かりやすかった」「座学でなく、体験から学びが得られた」「ユーモアがありリラックスして参加できた」などの感想をいただき、和気あいあいとした雰囲気の中でチームビルディングについて学び取ってもらえた様子が伺えました。また、「相手をよく観察することから始めたい」「多様性を取り入れて新しい視点を持てるようにしたい」など、学んだ事を職場に帰って実践したいという声も聞かれました。

## 2 公開セミナー② 障がい者の就労支援に関する公開セミナー

### 1. 概要

タイトル：シンポジウム「障がい者の就労継続支援」

日時：2016年10月29日(土) 13時00分～15時00分

シンポジスト：オールしずおかベストコミュニティ 障害者雇用推進コーディネーター 小倉 将数 氏

ヤマハ(株) 特例子会社 株式会社ヤマハアイワークス 代表取締役社長 竹ノ内 時彦 氏

特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワーカーセンター 山野 由香 氏

障害者就業・生活支援センター だんだん センター長 加藤 陽一 氏

コーディネーター：建木 健 (聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部助教)

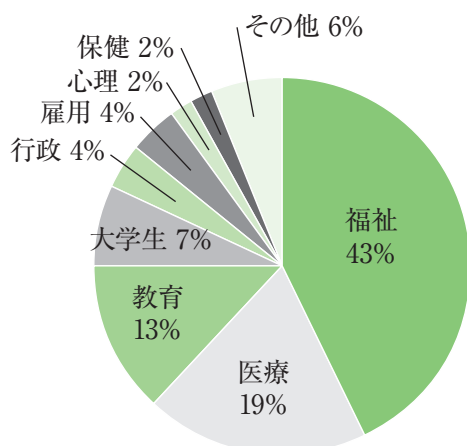
対象：保健医療福祉の専門職者、企業の人事担当者他

定員：50名

参加：55名

アンケート回収：46件

## 2. 参加者職業内訳 (合計 55 名)



福祉 (24 名) : 社会福祉士、生活支援員、介護職、スクールソーシャルワーカーなど

医療 (10 名) : 作業療法士、理学療法士など

教育 (7 名)、大学生 (4 名)、行政 (2 名)、雇用 (2 名)、心理 (1 名)、保健 (1 名)、その他 (4 名)

## 3. アンケート結果

### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

約半数の方が「日々の業務に役立つことやヒントになることが発見できればと思ったため」という目的でした。また、「障がい者の才能、潜在能力をどう発見し、現場で活かすことができるようになるかに興味があったから」「どのような方たちが関わっているのか知りたかったから」「障がい者を雇用する企業の考え、現場ではどんなことが必要とされるのか知りたかったから」など、障がい者の就労の現状に興味を持ち参加された方も多数いらっしゃいました。

### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

74%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答されました。「様々な施設や企業がどのような働きや支援をしているのか知ることができたから」「就労継続について話し合いの場が持てたこと」「企業側からの話を聞く機会が少ないので良い機会になった」等の意見が聞かれました。

### 設問 4 今回の講座の感想

「私達が潜在的に持っているかもしれない障がい者への差別意識についてハッとさせられた」「支援にはネットワークやつながりがとても大切だと実感した」「障がい者就労支援はまだまだ社会的に浸透していないのだと思った」など、多くの学びがあったようでした。他には、「リアルタイム質問受付サイトが良かった」「ディスカッションの時間がもっとあるとよかった」など講座の進行に関する意見も寄せられました。

### 3 公開講座① 認知症に関する公開講座

#### 1. 概要

タイトル：「超高齢社会を乗りきるためのケアのあり方 ～より豊かな生活を支えるために～」

【第1部】講演『高齢社会で求められる介護福祉実践 世界が注目する最新の自立支援介護』

【第2部】上映会『毎日がアルツハイマー2』（50分）

講演『認知症とともに生きる 認知症ケアを通して学ぶ人生哲学』

日時：2016年7月23日（土）13：00～16：00

講師：【第1部】古川 和稔（聖隷クリストファー大学社会福祉学部介護福祉学科教授）

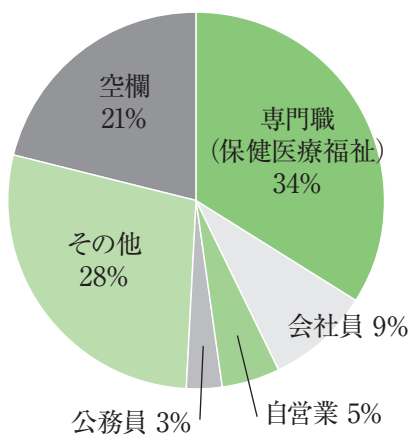
【第2部】関口 祐加氏（映画監督）

対象：一般の方

定員：100名 参加：126名

アンケート回収：82件

#### 2. 参加者職業内訳（合計126名）



保健医療福祉の専門職（43名）、会社員（11名）、自営業（6名）、公務員（4名）、その他（35名）、不明（27名）

### 3. アンケート結果

#### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「認知症の家族と共に生活する上でヒントになることがあればと思ったため」「いずれ自分の身に起こり得る認知症の勉強のため」「これからの社会がどのようなになり、どのような心構えで生活していけば良いか学びたいと思ったので」など、認知症そのものや社会の変化に対する知識を深めたいという方が多く見られました。また、「毎日がアルツハイマーの関口監督のお話をお聞きしたくて」「介護の仕事をしていて自立支援介護に興味を持ったので」という声も多く見られました。

#### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

90%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答されました。理由としては、「認知症について正しい理解ができていないことに気付いた」「自立支援介護という考えがあると知ったこと」という理由が多く見られました。一方で、「理想的な話だったが、教科書のように頭では分かっているけど、実際に実践していくのは簡単ではないので、時間が必要」という意見もありました。

#### 設問 4 今回の講座の感想

「未来のある内容で聞きに来てよかった」「関口監督ご自身の体験を踏まえた上での、今後に対する考え方が伺えて素晴らしい講演だった」「大変面白くためになった」など講師の人物と講演内容に大変満足したこと、また、「広い視点が持てた」「色々な視点があるとわかった」「糸口が見えた」「パーソンセンタードケアについてもう一度学んでみようと思った」「創意工夫について本当に考えさせられた」など、それぞれの視点で自分の生活に活かせるヒントを学び取ってもらえた様子が伺えました。

## 4 公開講座② 障がいを持つ子どもの育ちに関する公開講座

### 1. 概要

タイトル：障がいがある子どもを育てるとのこと

日時：2016年11月19日(土) 13時30分～15時30分

講師：水戸川真由美氏(公益財団法人 日本ダウン症協会(JDS) 理事、社団法人ドゥーラ協会認定 産後ドゥーラ)  
入江礼奈氏(専門里親、NPO 法人全国おやこ福祉支援センター相談員)

対象：一般の方

定員：100名 申込み：68名 参加：64名

アンケート回収：47件

託児人数：10名

### 2. 参加者属性(合計64名)

◆年代	(人)	◆性別	(人)
10代以下	2	男性	14
20代	3	女性	50
30代	9		
40代	22		
50代	17		
60代以上	5		
未記入	6		

### 3. アンケート結果

#### 設問1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「障がいのある子どもを支援する仕事をしており、ヒントになる話が聞ければと思ったため」「子どもに障がいがあるので、子育ての体験談を聞き参考になればと思ったため」など、生活の中で障がいのある子どもに接する上での参考にしたいという声が多くありました。また「講師のことを知っていて、話が聞きたかったから」という声も多くありました。

#### 設問2・3 目的は達成できましたか？ その理由

70%以上の方が、「達成できた」と回答しました。理由としては、「実際の障がいのある子の子育ての様子について具体的な話を聞けたから」「多様性を理解するということで整理ができた」など、満足度の高い回答のほか、「地域の中の特別な事例のように感じてしまった」「障がいの子を持つ親はどんなことで悩んでいるのか、エピソード等の具体的な話をもっと聞きたかった」といった声も寄せられました。

#### 設問4 今回の講座の感想

「わが子も障がいを持っているが決して不幸ではなく、一緒に成長していきたいと思った」「“神様に与えられた役割がどの人にも在る”という言葉に衝撃を受けた」「常々、障がい者・健常者と区別することに疑問を感じていたけれど、障がいがある子どもとの生活も誰にでもある日常だと感じた」など多くのことを感じ取って頂けた様子でした。また、「託児を利用していただき大変助かった」という声も寄せられました。

### 3. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

※合計 78 件／担当教員の所属・職位は 2016 年当時

#### 1 専門職対象

No	主催	内容	担当
1	島田市長寿介護課	平成 28 年度 島田市地域包括支援センター研修会 テーマ：地区診断について 対 象：島田市内地域包括支援センター職員、 島田市役所庁内保健師	看護学部 鈴木知代 教授
2	聖隷福祉事業団 聖隷三方原病院	平成 28 年度聖隷三方原病院認定看護管理者教育 課程ファーストレベル 科目名：人材育成論 単 元：人材育成の基礎知識 対 象：認定看護管理者教育課程ファーストレベル 履修者	看護学部 藤井徹也 教授
3	聖隷福祉事業団 聖隷三方原病院	平成 28 年度聖隷三方原病院認定看護管理者教育 課程ファーストレベル 科目名：看護専門職論 単 元：看護業務の行動指針、 看護専門職のキャリア発達 対 象：認定看護管理者教育課程ファーストレベル 履修者	看護学部 川村佐和子 教授
4	聖隷福祉事業団 特別養護老人ホーム 浜北愛光園	ワークショップ テーマ：特別養護老人ホームのための『BED プロジェ クト』～施設利用者のより良い住まい環境を 考える 対 象：市内の老人保健施設の介護職等	看護学部 炭谷正太郎 助教
5	掛川市保健福祉部	保健事業従事者研修 テーマ：健康教育の手法を学ぶ 対 象：保健師、栄養士	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
6	伊豆の国市大仁中学校	田方地区学校保健講演会 テーマ：おもしろい！ためになる！健康教育 対 象：小中学校養護教諭	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
7	沼津市立大岡小学校	労働安全衛生研修会 テーマ：ほめる技術を向上し、 職場の人間関係を円滑に 対 象：教職員	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
8	静岡大学	教員免許状更新講習 テーマ：養護教諭の専門性とその成長 対 象：県内の現教職員	看護学部 高橋佐和子 助教
9	静岡県西部 健康福祉センター	平成 28 年度新任地域保健従事者研修会 テーマ：PDCA サイクルを意識した業務を組み立てよう 対 象：地域保健活動に従事して 1～3 年目の職員 及び西部健康福祉センター職員	看護学部 若杉早苗 助教
10	医療法人社団リラ 溝口病院	平成 28 年度新任看護職員研修会 テーマ：精神科看護基礎講座 対 象：新任看護師、看護助手	看護学部 清水隆裕 助教



No	主催	内容	担当
11	NPO 法人らるご 子ども研究所	研修会 テーマ：支援者のための家族療法 対 象：保育士、幼稚園教諭、教職員、 施設関係者等	社会福祉学部 社会福祉学科 石川瞭子 教授
12	浜松市きらめき研究会	小・中・高校等の養護教諭の事例検討会 テーマ：各校で対応に苦慮している事例等 対 象：市内小中高養護教諭	社会福祉学部 社会福祉学科 石川瞭子 教授
13	浜松市民生委員 児童委員協議会	1 期目研修会 テーマ：「民生委員児童委員活動を通して」事例発表 のコーディネートおよび助言・総評 対 象：1 期目以上の委員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
14	介護支援専門員 連絡協議会	平成 28 年度介護支援専門員連絡協議会北支部 地域包括支援センター細江 地域包括支援センター 三方原 合同研修 テーマ：地域ケア会議を活用しよう 対 象：介護支援専門員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
15	社会福祉法人 浜松市社会福祉事業団	職員研修会 テーマ：合理的配慮と利用者のベストインタレスト 対 象：浜松市社会福祉事業団職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
16	浜松市 青少年育成センター	第 101 回大都市青少年対策事務主管者協議会 テーマ：浜松市若者支援スーパーバイザーにおける 講話 対 象：政令指定都市 20 市の青少年対策担当者	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
17	静岡県精神保健 福祉士協会	平成 28 年実習指導に関する研修会 テーマ：実習で大切にしたいこと ～出会い・はじまり・つながる～ 対 象：静岡県精神保健福祉士協会会員他	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
18	聖隷福祉事業団 浜名湖エデンの園 接遇委員会	園内研修 テーマ：利用者への関わり方 対 象：施設職員	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
19	社会福祉法人 南浜名湖会 特別養護老人ホーム 光湖苑	施設内研修 テーマ：要介護高齢者の自立支援に向けた取り組み における、おむつ外しのための理論と基礎 知識について 対 象：現職介護職者、施設管理者	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
20	浜松市西区 地域包括支援センター (大平台地区、雄踏地区、 和地地区)	第 2 回 ケアマネサロン テーマ：いいケアマネージャーとは？ 介護支援専門員の今後を考える 対 象：西区内の居宅介護支援事業所に勤務する ケアマネージャー	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
21	聖隷福祉事業団 聖隷厚生園讃栄寮	看護師研修会 テーマ：スムーズな多職種協働の作り方等 対 象：静岡県下の救護施設 8 施設の看護師他	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
22	聖隷福祉事業団 法人本部	キャリアアップ研修 テーマ：自立を取りもどす！まったく新しい介護～ 「おむつゼロ」「認知症を治すケア」 「さよなら胃ろう」～ 対 象：福祉施設や在宅で介護に従事する方	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授

No	主催	内容	担当
23	静岡県介護福祉士会	平成 28 年度介護福祉士実習指導者講習会 テーマ：介護課程の理論と指導法①② 対 象：介護福祉士資格修得後 3 年以上の 実習指導者を旨とする者	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
24	静岡県介護福祉士会	平成 28 年度介護福祉士ファーストステップ研修 テーマ：コミュニケーション技術の応用的な展開 (1) 対 象：基礎的業務に習熟し、介護福祉士資格 修得後 2 年以上の実務経過を有する者、 初任者研修修了者	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
25	社会福祉法人 デンマーク牧場福祉会	特別養護老人ホーム デアコニア介護職員研修 テーマ：認知症の方の笑顔や能力を引き出す レクリエーションを学ぶ 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
26	中東遠地区 特別養護老人ホーム 施設長連絡会	介護職員研修会 テーマ：介護職員として誇りに思えること 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
27	社会福祉法人七恵会	主任フロアリーダー研修会 テーマ：プレゼンテーション技法を学ぶ 対 象：主任・フロアリーダー	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
28	静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉 人材センター	平成 28 年度福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程 初任者コース (中部 4) 3 日目 テーマ：行動指針の策定、キャリアデザインと 行動計画の策定 対 象：静岡県中部地区福祉専門職者	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
29	静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉 人材センター	平成 28 年度福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程 初任者コース (中部 2) 1 日目 テーマ：キャリアデザインとセルフマネジメント、 福祉サービスの基本理念と倫理、 メンバーシップ・リーダーシップ 対 象：静岡県中部地区福祉専門職	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
30	御前崎市役所 高齢者支援課	御前崎市介護支援専門員連絡会 テーマ：事例検討 対 象：地域の居宅介護支援専門員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
31	静岡県社会福祉士会	実践研究セミナー テーマ：プレゼンテーション方法 対 象：静岡県社会福祉士会会員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
32	社会福祉法人七恵会	浜松中央長上苑 主任・フロアリーダー研修会 テーマ：リーダーとしての目標管理を学ぶ 対 象：法人内主任・フロアリーダー	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
33	社会福祉法人 デンマーク牧場福祉会	身体拘束防止研修 テーマ：身体拘束とは？事例を通じて学ぶ 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
34	静岡県私立幼稚園 振興協会	平成 28 年度教育研究講座 テーマ：子どもの理解と記録—子どもの主体性を 育む保育のために— 対 象：県内私立幼稚園の 4～7 年目の教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授

No	主催	内容	担当
35	静岡県	子育て支援員研修および放課後児童支援員認定資格研修 対 象：保育士資格を有する者他	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
36	静岡県健康福祉部 こども未来局	放課後児童支援員認定資格研修 テーマ：学校と地域の連携	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
37	浜松市教育委員会	平成 28 年度保育活動研修 テーマ：運動好きな子を育てる発育発達過程に沿った運動遊び 対 象：幼稚園教諭、小・中学校教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 和久田佳代 准教授
38	医療法人社団緩和会 掛川東病院	実習指導者勉強会 テーマ：臨床実習における病態関連図の作成 対 象：静岡県理学療法士学会員他	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
39	JA 静岡厚生連 リハビリテーション 中伊豆温泉病院	リハビリテーション科勉強会 テーマ：運動療法を継続するための行動分析学の考え方 対 象：病院職員	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
40	静岡県理学療法士会	平成 28 年度新人教育プログラム研修会 テーマ：クリニカルリーズニング 対 象：理学療法士	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
41	静岡県理学療法士会	研修会 テーマ：産後理学療法の最前線～骨盤帯痛と体幹・骨盤のバイオメカニクス、海外の取り組みについて～ 対 象：医療従事者	リハビリテーション学部 理学療法学科 坂本飛鳥 助教
42	静岡県立 浜松特別支援学校 (磐田分校)	特別支援教育における専門職の訪問事業 教員への聞き取りや授業観察を通しての児童生徒の状況把握、教員への助言	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
43	浜松市根洗学園	幼稚園保育園等支援者学習会 他 テーマ：感覚統合の基本的知識とその実践 対 象：幼稚園教諭、保育士	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
44	はままつ保育士会	評議員研修会 テーマ：気になる子どもの理解と支援 —感覚統合の視点から— 対 象：浜松市内保育施設園長、主任保育士等	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
45	静岡大学	教員免許状更新講習 テーマ：作業療法からみた発達障害の理解と支援について 対 象：県内の現教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
46	静岡県言語・聴覚・ 発達障害教育研究会	県西部地区幼稚園・保育園担当者対象講習会 テーマ：気になる子どもの理解と支援について 対 象：幼稚園・保育園等担当者	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授

No	主催	内容	担当
47	すみよし保育園	園内研修会 テーマ：気になる子どもの理解と支援 —感覚統合の視点から— 対 象：保育園職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
48	静岡県厚生農業 協同組合連合会	JA 静岡厚生連リハビリテーション科職員研修 テーマ：摂食嚥下訓練の考え方とリスク管理 対 象：理学療法士、作業療法士、言語聴覚士他	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 柴本勇 教授
49	言窓会	研修会 テーマ：WAB 失語症検査の特徴—SLTA との比較 対 象：言窓会会員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 谷哲夫 准教授
50	こうのとりの保育園	言語検査についての研修 対 象：看護師、保育士	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 中村哲也 助教
51	浜松市教育委員会	平成 28 年度通級教室指導者研修 テーマ：通級指導教室での言語指導について 対 象：通級指導教室（言語）担当教員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 木原ひとみ 助教

## 2 一般の方対象

No	主催	内容	担当
1	聖隷福祉事業団 保健事業部	杏林堂薬局 第4回美と健康の体験フェスタ 2016 看護師体験講師 対 象：杏林堂薬局顧客の小学生以下	看護学部 鈴木知代 教授 仲村秀子 准教授 若杉早苗 助教 伊藤純子 助教
2	浜松市 北部協働センター内 女性学級ゆうかむ	女性学級 テーマ：認知症の初期症状、予防方法等に関する 講座 対 象：60～70歳代の女性	看護学部 野崎玲子 准教授
3	小規模多機能型居宅 介護事業所 あそびケアホーム	第2回安心・安全な地域を作り隊勉強会 テーマ：支援の必要な住民が地域で暮らし続ける ために 対 象：地域住民等	看護学部 野崎玲子 准教授
4	浜松市こども家庭部	平成28年度保育士再就職支援研修会 テーマ：子どもの安全と衛生 対 象：現在保育の職に就いていない保育士資格を 有する人	看護学部 宮谷恵 准教授
5	牧之原市川崎区・ 静波区	静波区・川崎区合同防災講演会 テーマ：調査・研究報告「東日本及び熊本地震の教訓」 対 象：一般市民	看護学部 若杉早苗 助教
6	浜松市教育委員会 浜松市立萩丘小学校 浜松市立金指小学校 浜松市立井伊谷小学校 浜松市立豊岡小学校 浜松市立奥山小学校 浜松市立新津小学校 浜松市立新津中学校 浜松市三方原中学校 浜松市立浜北北部中学校 浜松市立引佐南部中学校 静岡市立長田西中学校 沼津市立大岡南小学校 沼津市立大平中学校 静岡県立天竜特別支援学校	テーマ：みーちゃんママの笑顔の子育てレシピ 「おやすみなさい」を子供から言わせる5つのコツ、 みーちゃんママの笑顔の子育てレシピ～ほめて育てる 骨太な子ども～、生活習慣を考えよう～睡眠の大切さ～、 性に関する講座「大人の世界へ羽ばたく君たちへ」、 ノーマディア・睡眠について、家族みんなで心も体も 健康に～自他の命を大切にしよう～、自分や相手の 良さを見つけよう等 対 象：児童生徒、保護者、教職員	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
7	和地地区 社会福祉協議会	福祉講演会 テーマ：「地域づくり」を考える 対 象：地域住民	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
8	磐田市民生委員・ 児童委員協議会 地域福祉部会	第2回全体研修会 テーマ：地域福祉の方向性と民生委員児童委員 協議会へのアドバイス 対 象：磐田市民生委員・児童委員協議会地域福祉 部会委員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
9	磐田市見付地区 社会福祉協議会	講演会 テーマ：子どもの問題行動と解決方法 対 象：地域住民、学校関係者、地区役員等	社会福祉学部 社会福祉学科 石川瞭子 教授

No	主催	内容	担当
10	浜松市 浜松手をつなぐ育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：思春期・青年期のメンタルヘルス 対 象：高校生以上の生徒・学生	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
11	NPO 法人 精神保健福祉会 さざなみ会	講演会 テーマ：メンタルヘルスケアやストレス対策の重要性 について 対 象：法人会員、当事者施設職員、一般	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
12	引佐地区 社会福祉協議会	地域担い手養成研修会 テーマ：この地域で暮らし続けるためにできること ～地域での福祉活動は誰のための活動か～ 対 象：地域住民	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
13	静岡県	静岡県ジョブコーチ養成研修 2016 テーマ：精神障害の特性と職業的課題～ 「はたらく」を支えるためのヒント～ 対 象：障がいのある人の就労・雇用支援をする人、 関心のある人	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
14	聖隷クリストファー 中・高等学校	校内教員夏季研修 テーマ：発達障害の基礎知識と対応について 対 象：聖隷クリストファー中・高等学校教員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
15	日本国家公務員 労働組合連合会	第 46 回国公女性交流集会分科会 テーマ：介護にかかる社会保障制度を活用しながら、 生き生きと働きたい 対 象：国家公務員	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
16	浜松市	これからの「浜松の介護」の話をしよう テーマ：これからの介護に関する講演、 パネルディスカッション 対 象：浜松市民	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
17	浜松協働学舎親の会	平成 28 年度浜松協働学舎親の会講演会 テーマ：社会福祉士（第三者）が担う成年後見業務 について 対 象：浜松協働学舎親の会会員、職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
18	浜松市ファミリー・ サポート・センター	スキルアップ講習会 テーマ：保護者との信頼関係を深める コミュニケーション 対 象：まかせて・どっちも会員（子どもを預かる 側の会員）	社会福祉学部 こども教育福祉学科 坂本道子 教授
19	浜松市ファミリー・ サポート・センター	フォローアップ講習会 テーマ：実技指導、子供との接し方等 対 象：まかせて・どっちも会員（子どもを預かる 側の会員）	社会福祉学部 こども教育福祉学科 小川千晴 助教
20	浜松市教育委員会	平成 28 年度 家庭教育講座（3 回） テーマ：子供の学ぶ力を育むために 対 象：小学校次年度入学児童保護者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 細田直哉 助教

No	主催	内容	担当
21	老人福祉センター萩原荘	転倒予防教室（元気はつらつ教室） テーマ：高齢者の運動機能低下及び認知症予防指導 対 象：地域の高齢者	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
22	静岡県理学療法士会	研修会 テーマ：理学療法士がやさしく解説～産前・産後の心と体のケアについて～ 対 象：一般市民	リハビリテーション学部 理学療法学科 坂本飛鳥 助教
23	静岡県立 浜松特別支援学校	特別支援教育講座 テーマ：児童生徒の発達支援と教員指導 対 象：児童生徒、教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
24	浜松市根洗学園	子育て支援 保護者支援講座 テーマ：からだの発達と関わり方 対 象：幼児期における子どもの保護者	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
25	浜松市教育委員会	家庭教育講座 テーマ：子供が豊かに育つ 心とからだ 対 象：小学校次年度入学児童保護者	リハビリテーション学部 作業療法学科 中島ともみ 助教
26	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座 入門課程講義 テーマ：聴覚障害者の基礎知識 対 象：一般市民	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子 准教授

## 4. 保健医療福祉団体の委員等派遣

※合計 42 件／担当教員の所属・職位は 2016 年当時

No	内容	担当
1	認定看護管理者教育運営委員会 委員 任期：2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：聖隷福祉事業団 認定看護管理者教育課程	看護学部 藤本栄子 教授
2	治験審査委員会 外部委員 任期：2016 年 5 月 1 日～2018 年 3 月 31 日 主催：聖隷福祉事業団 聖隷三方原病院	看護学部 熊澤武志 教授
3	浜松市建築審議会 委員 任期：2016 年 9 月 1 日～2018 年 8 月 31 日 主催：浜松市（都市整備部建築行政課）	看護学部 仲村秀子 准教授
4	静岡県専任教員養成講習会運営委員会 委員 任期：2016 年 9 月 16 日～2018 年 3 月 31 日 主催：静岡県看護協会	看護学部 檜原理恵 准教授
5	第三者委員会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人十字の園	看護学部 野崎玲子 准教授
6	浜松市母子保健推進会議 委員 任期：2016 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日 主催：浜松市	看護学部 神崎江利子 講師
7	浜松市社会福祉協議会のあり方検討委員会 委員 任期：2016 年 9 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
8	事務事業評価外部評価委員会 アドバイザー 日程：2016 年 9 月 9 日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
9	浜松市社会福祉審議会 委員 任期：2016 年 4 月～2017 年 3 月 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
10	浜松市精神保健福祉審議会 委員 任期：2016 年 4 月～2017 年 3 月 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
11	平成 27・28 年度 浜松市発達障害児者支援推進会議 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市（子育て支援課）	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
12	平成 28 年度思春期メンタルヘルス推進会議 推進委員 日程：2016 年 6 月 14 日、2017 年 1 月 23 日 主催：浜松市精神保健福祉センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
13	浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会 委員 任期：2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市精神保健福祉センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
14	浜松地域若年者就労支援推進協議会 委員 任期：2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市（産業部産業総務課）	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授



No	内容	担当
15	浜松市就学支援委員会 委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：浜松市教育委員会 学校教育部	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
16	浜松市子ども・若者支援スーパーバイザー 任期：2016年4月～2017年3月 主催：浜松市青少年育成センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
17	浜松市障害者虐待防止対策支援事業 アドバイザー 任期：2016年4月1日～2017年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
18	浜松市社会福祉審議会（地域福祉専門分科会）委員 任期：2016年6月10日～2017年4月15日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
19	コミュニティソーシャルワーカー情報交換会 アドバイザー 日程：2016年4月1日～（月1回） 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
20	浜松市社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
21	磐田市障害者施策推進協議会 委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：磐田市（健康福祉部健康福祉課）	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
22	浜松市発達医療総合福祉センター苦情解決第三者委員会 委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：社会福祉法人浜松市社会福祉事業団	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
23	第三者委員会 委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：社会福祉法人復泉会	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
24	運営推進会議 委員 任期：2016年9月 主催：社会福祉法人 慶成会	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
25	浜松市住生活基本計画見直しに係る有識者会議 委員 任期：2016年6月1日～2017年3月30日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
26	浜松市住宅管理運営委員会 委員 任期：2015年7月1日～2017年6月30日 主催：浜松市（都市整備部住宅課）	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
27	静岡県福祉サービス第三者評価推進委員会 委員 任期：2016年8月19日～2018年8月18日 主催：静岡県健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
28	浜松市高齢者虐待防止支援事業 アドバイザー 任期：2016年4月1日～2017年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授

No	内容	担当
29	浜松市福祉人材バンク運営委員会 委員 任期：2016年4月1日～2018年3月31日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
30	社会福祉法人みどりの樹 評議員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
31	社会福祉法人七恵会 評議員 任期：2015年6月30日～2017年6月29日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
32	第三長上苑運営推進会議委員 委員 任期：2015年7月1日～2017年6月30日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
33	社会福祉法人昴会 監事 任期：2014年10月1日～2016年9月30日 主催：社会福祉法人昴会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
34	法人役員 任期：2015年6月27日～2017年6月26日 主催：NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 (E-jan)	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
35	第三者委員 任期：2015年4月1日～2017年3月31日 主催：社会福祉法人和光会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
36	地域密着介護老人福祉施設運営推進会議 委員 任期：2016年4月1日～2018年3月31日 主催：聖隷福祉事業団特別養護老人ホーム和合愛光園	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
37	和合愛光園デイサービスセンター（認知症対応型通所介護）運営推進会議 委員 任期：2016年9月～2018年8月 主催：聖隷福祉事業団和合愛光園デイサービスセンター	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
38	まちの保健室 相談員 日程：2016年7月15日 主催：静岡県看護協会	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
39	磐田中部小学校学校運営協議会 委員 任期：2016年4月1日～2017年3月31日 主催：磐田市立磐田中部小学校	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
40	平成28年度若者支援スーパーバイザー 任期：2016年4月～2017年3月 主催：浜松市青少年育成センター	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
41	浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会 委員 任期：2015年4月～2017年4月 主催：浜松市（こども家庭部）	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
42	からだあそび教室 スーパーバイザー 任期：2016年6月10日～2017年3月31日 主催：浜松市根洗学園	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授

## 5. 研究支援

※合計4件／担当教員の所属・職位は2016年当時

No	内容	担当
1	静岡県看護協会研修会 看護研究の基礎—研究計画書にトライ—(西部) 日程：2016年8月8日、8月9日、9月6日 対象：静岡県内看護師 場所：聖隷クリストファー大学	看護学部 藤井徹也 教授
2	聖隷福祉事業団聖隷保育学会 研究に関する指導・講評 日程：2016年8月27日、2017年1月14日 対象：聖隷福祉事業団保育園職員 場所：こうのとりの東保育園	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
3	第20回静岡県理学療法士学会 座長 日程：2016年6月18日、6月19日 場所：ふじのくに千本松フォーラム プラサ ヴェルデ	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
4	障がい者を有する人の住みよい住宅造りに関する専門的知識の提供、 共同開発 主催：株式会社 河原圭一事務所 前向き住宅グループ	リハビリテーション学部 作業療法学科 新宮尚人 教授 鈴木達也 助教 建木健 助教 中島ともみ 助教

## 6. 資料

### 1 ニュースレター第 8 号 (年 1 回発行)

発行： 2016 年 6 月 13,000 部

- 内容：
- ・センター長挨拶「保健医療福祉の質向上に向けて」
  - ・地域と歩む研究紹介 「地域在住高齢者の屋内外での転倒関連因子は異なる」  
「妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問」
  - ・地域と歩む活動紹介 超高齢社会を支える地域構築に向けての活動
  - ・保健医療福祉団体の委員等派遣状況、研究支援実施状況
  - ・2016 年度公開講座のご案内
  - ・2016 年度地域貢献事業研究費 採択研究一覧

配布先：実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、市内図書館・協働センターなど

### 2 チラシ制作

#### 1. 公開セミナー・公開講座の案内

種類	講座タイトル
公開セミナー	働くモチベーションを生み出すチームづくり ～仕事上手は「ほめニュケーション上手」～
公開セミナー	シンポジウム 障がい者の就労継続支援
公開講座	超高齢社会を乗りきるためのケアのあり方 ～より豊かな生活を支えるために～
公開講座	障がいがある子どもを育てるということ

## 2. 2016 年度地域貢献事業研究報告会の案内

### 3 専任教員が大会長等になっている学術大会等への協力・後援

学術大会等	大会長等	日程
2016 じゃんだらにい with あ〜と de い〜ら	大場 義貴 社会福祉学部准教授	2016 年 6 月 11 日
第 3 回聖隷リハビリテーションセミナー -頸部肩周囲の触診編-	有菌 信一 リハビリテーション学部教授	2016 年 7 月 24 日
第 4 回聖隷リハビリテーションセミナー 実践!呼吸・心臓リハビリテーション!	有菌 信一 リハビリテーション学部教授	2016 年 11 月 6 日

### 4 ホームページの更新

URL : <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/>

大学ホームページ (<http://www.seirei.ac.jp/>) ⇒社会との連携⇒保健福祉実践開発研究センターからリンクしています。



The screenshot shows the website for the Center for Health and Welfare at Seirei Christ the King University. The page features a header with the title '地域と歩む' (Walking with the Community) and the center's name. A sidebar on the left contains a navigation menu with categories like 'カテゴリ', 'ニュース', 'ウェブページ', and 'リンク'. The main content area displays several news items:

- 2017年8月29日 (火)**: 公開web講座「加齢と自動車運転」を公開しました。聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センターでは、地域の保健医療福祉の更なる質の向上のため、専門職や一般の方を対象とした公開講座を実施しています。今年度新たな試みとして、公開web講座を実施します。詳しくはこちらから [ニュース 個別ページ](#)
- 2017年8月3日 (木)**: 市民公開講座 実施報告 7月29日 (土) に一般の方を対象とした公開講座「介護福祉実践とスピリチュアルケア〜介護福祉の奥深さ、幅広さ、魅力を再発見する〜」を実施しました。詳しくはこちらから [ニュース 個別ページ](#)
- 2016年11月21日 (月)**: 市民公開講座 実施報告 11月19日 (土) に一般の方を対象とした公開講座「障がいがある子どもを育てるといこと」を実施しました。詳しくはこちらから [ニュース 個別ページ](#)
- 2016年11月11日 (金)**: 地域貢献事業研究報告会へのご来場ありがとうございました。11/5 (土)、保健福祉実践開発研究センターの活動を広く知っていただくことを目的に、2015年度に実施された地域貢献事業研究のポスター報告および保健福祉実践開発研究センターの活動報告を、休憩場所としての機能も備えたラウンジ形式にて実施しました。当日は102名の方にご来場いただき、研究発表を聞いたり、研究のポスター・活動報告を見たり、ピアノミニコンサートを聴いたり、思い思いに過ごしていただけたかと思えます。今後とも「地域と歩む」活動をしていきたいと思っておりますので、保健福祉実践開発研究センターの活動に関心を寄せていただければ幸いです。 [ニュース 個別ページ](#)

## 1. 更新ページ

- ・地域貢献事業研究  
2016 年度地域貢献事業研究費採択課題一覧を掲載
- ・公開セミナー・公開講座  
2016 年度公開講座案内を掲載、インターネット申込フォーム
- ・保健福祉実践開発研究センターの取り組みの方針  
取り組みの方針について図で説明
- ・講師・委員等の派遣  
2016 年度の講師・委員等の派遣実績を掲載

## 2. 当センターへの問い合わせ方法

ホームページに問い合わせフォームを設置していますので、ぜひご利用ください。

URL : <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html>

カテゴリ	保健福祉実践開発研究センターへの依頼
ニュース	共同研究事業へのご参加や、研究支援、講師派遣、専門団体等への委員の派遣等のご相談は、下記にご連絡いただくか、申込フォームから送信してください。
ウェブページ	聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター 〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL: 053-439-1400 FAX: 053-439-1406 <a href="http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/">http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/</a>
保健福祉実践開発研究センター概要	
保健福祉実践開発研究センターの取り組みの方針	
講師・委員等の派遣	
<b>保健福祉実践開発研究センターへの依頼</b>	
地域貢献の研究紹介	
公開セミナー・市民公開講座	
リンク	
聖隷歴史資料館	
聖隷クリストファー中・高等学校	
クリストファーこども園	
聖隷クリストファー大学	

貴団体名	<input type="text"/>
担当部署	<input type="text"/>
担当者名	<input type="text"/>
郵便番号	<input type="text"/>
都道府県	静岡県 ▼
住所	<input type="text"/>
電話番号	<input type="text"/>
FAX番号	<input type="text"/>
メールアドレス	<input type="text"/>
	(確認)
分類	<input type="checkbox"/> 共同研究事業 <input type="checkbox"/> 研究支援 <input type="checkbox"/> 審議会等委員の推薦 <input type="checkbox"/> 講師派遣 <input type="checkbox"/> その他
依頼内容	詳細(希望日時・期間、分野、人数等) <input type="text"/>
入力内容確認    リセット	

電話でのお問い合わせ先：053-439-1400 (大学代表)

# 地域と歩む

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare

ニュースレター

# News letter 2016.6 Vol.08



## 保健医療福祉の質向上に向けて

保健福祉実践開発研究センター長 大場 義貴



聖隷クリストファー大学では、保健医療福祉の総合大学として建学の精神である「生命の尊厳と隣人愛」に基づき、人材育成を行っています。本センターは、保健医療福祉分野に関する知的資源を地域に還元し、地域の保健医療福祉の質の向上に寄与することを基本目標として、2009年に設置されました。今年度の目標を、昨年に引き続き、1) 地域との共同事業・研究の組織的推進 2) 地域のニーズに応じた大学の情報・知識・技術の共有化の推進 3) 地域の保健医療福祉分野の政策形成への参画としました。本ニュースレター内でご紹介しています通り、公開講座や地域貢献事業研究を実施すると共に、ホームページにてわかりやすく研究成果を報告していきます。更に、浜松市の関係部署と連携して地域の保健医療福祉分野の政策形成に貢献するための準備を進めて参ります。

是非皆様に、本センターの諸活動をご活用いただき、地域とあゆむセンターとして、益々発展させて参りたいと存じますので、引き続きご支援いただけますよう、よろしくお願い致します。

### 目次

- ◆ 保健福祉実践開発研究センター長挨拶  
地域貢献事業研究費2016年度報告会のご案内
- ◆ “地域と歩む”地域貢献事業研究の紹介
  - 『地域在住高齢者の屋内外での転倒関連因子は異なる』
  - 『妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問』
- ◆ “地域と歩む”地域貢献活動の紹介
  - 『超高齢社会を支える地域構築に向けての活動』
  - 保健医療福祉団体の委員等派遣状況、研究支援実施状況
- ◆ 2016年度公開講座のご案内／  
2016年度地域貢献事業研究費採択一覧

### お知らせ

#### 地域貢献事業研究費2016年度報告会のご案内

2015年度に地域貢献事業研究費の採択を受けた事業研究6件のポスター発表を下記の通り開催します。聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催です。ぜひお立ち寄りください。

**日時** 2016年11月5日(土) 10:00~15:00(予定)

**場所** 聖隷クリストファー大学

※詳細は保健福祉実践開発研究センターのホームページ等でご案内いたします。



2015年度報告会の様子

## 保健福祉実践開発研究センターとは？

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、地域の専門職向けの研修や一般市民の方々への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉のさらなる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。

## 地域貢献事業研究の紹介

当センターでは、本学周辺校地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として「地域貢献事業研究費」を分配しています。2015年度に採択された研究の中から2件をご紹介します。



### 地域在住高齢者の屋内外での転倒関連因子は異なる

**研究代表者** リハビリテーション学部理学療法学科 准教授 吉本 好延

- ◆共同研究者：[分担者] 根地嶋誠（聖隷クリストファー大学）、有菌信一（聖隷クリストファー大学）  
[協力者] 鈴木郁乃（浜松市老人福祉センター 萩原荘）
- ◆対象地域：浜松市

皆様は、高齢者の『転倒』にどのようなイメージをお持ちでしょうか。「骨折して寝たきりの原因になる」、「転倒しないように細心の注意を払う」などが多いと思います。高齢者だけでなく、多くの医療従事者も転倒にネガティブなイメージを持っていますが、転倒の全てが『悪』なののでしょうか。理学療法学科では、浜松市老人福祉センター萩原荘と共同して、高齢者の老年症候群の発生に関連する因子を



長期的に検討しています。老年症候群の一つである転倒に着目

した我々の研究では、屋内での転倒は低栄養のリスクが高い健康状態の不良な高齢者に多く、屋外での転倒は歩行能力・バランス能力が高い健康状態の良好な高齢者に多いことが明らかになりました。転倒した場所によって転倒に関連する因子が異なることが考えられ、全ての転倒が必ずしもネガティブな存在ではない可能性が示されたのです。理学療法士は、対象者の過去の転倒歴を聴取することで、機能障害や能力障害の程度を推定していますが、過去の転倒歴が必ずしも対象者の健康指標を反映しない可能性があることに注意する必要があります。



### 妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問

**研究代表者** 助産学専攻科 教授 久保田 君枝

- ◆共同研究者：[分担者] 三輪与志子（聖隷クリストファー大学）  
[協力者] 北堀昌代（聖隷三方原病院）、疋田百合香（遠州総合病院）
- ◆対象地域：浜松市

子ども虐待の件数は増加の一途にあり、虐待予防の対策が急務となっています。そこで、アメリカにて3回Healthy Family America (以後HFAという) の研修を受講し、HFAの理念や家庭訪問のスキルを学び、4年前にHFAの理念に基づき、浜松方式での虐待予防のための家庭訪問活動グループ Healthy Family はままつ (以後HFHという) を結成しました。子ども虐待の予防には、妊娠期からの関わりが親子の愛着形成に有効といわれていることから、HFHでは妊娠期からの家庭訪問による親子の愛着形成を促し、親子の自立を図り、虐待予防に繋げることを目的に活動を行っています。

2015年度は第3回の訪問員養成講座を行い11名が受講しました。訪問事例は10名、訪問事例の特徴は望まない妊娠、10代の妊娠、高齢出産、シングルマザー、虐待を受けた経験がある、貧困などです。妊娠期からの家庭訪問を通して、妊婦は母親意識が少しずつ芽生え始め、お腹の子どもへの愛着表現が表出されるようになり、出産後においても子どもが可愛いと思える、愛着行動が見られるようになったケースもありました。

本活動の今後の課題は、訪問員の養成講座を行い訪問員の増員と家庭訪問のスキルアップ、さらに、家庭訪問活動を行うための資金の確保であると考えます。





## 地域貢献活動の紹介

## 超高齢社会を支える地域構築に向けての活動

社会福祉学部介護福祉学科 教授 古川 和稔

超高齢社会を迎えた現在、「要介護高齢者の増加」と「介護人材不足」が大きな課題になっています。この課題を解決する鍵は次の2点だと考えています。①「元気な高齢者を増やすこと」、②「たとえ要介護状態になっても、安心して暮らせる社会を構築すること」です。

そこで私は、介護福祉士、理学療法士としての知識と経験を活かして、「健康づくりのポイント」や、「自立」を取り戻すまったく新しい介護—「自立支援介護」の普及に向けた活動を展開しています。具体的には、福祉・医療専門職者対象の研修会や講演会を開催したり、地域住民対象の講演活動等を行うなど、超高齢社会を支える地域構築に向けた活動に取り組んでいます。

わが国が2025年の完成を目指している「地域包括ケアシステム」では、日常生活圏域ごとに必要なサービスを整えて、出来るだけ長く、住み慣れた地域で暮らすことが出来る社会の構築を目指



しています。そこでは、自分自身で健康を維持する「自助」と、地域で支え合う「互助」が大切です。現在私が力を入れている活動は、この「自助」と「互助」を促進するための活動です。

もう一つ力を入れている活動は、「介護人材の確保」です。たとえ要介護状態になったとしても、専門性の高い介護福祉士の支援を受けることにより、その人らしく人生を送ることが出来ます。そこで、浜松市福祉人材バンク運営委員会の委員として、地域の専門家と連携しながら、介護人材の確保に向けた活動を行っています。



古川先生からのお知らせ

7月5日(火)に、浜松駅近くの「プレスタワー 静岡新聞ホール」で、「みんなを元気にする自立支援介護」と、「ここでしか聞けない「良い老人ホームの選び方」と題した、2本立ての講演会を開催します。福祉・医療専門職者の方々だけでなく、一般市民の皆様も大歓迎ですので、ぜひお申込みください。詳細やお申込みは、聖隷クリストファー大学ホームページまたは聖隷クリストファー大学(電話:053-439-1401)までお問い合わせください。

## 本学の教員は、保健医療福祉の専門分野の委員等として地域に貢献しています。

## 保健医療福祉団体の委員等派遣状況(2015年度)

静岡県社会福祉協議会 平成27年度社会福祉法人の公益的活動検討会 委員  
 浜松市教育委員会 はままつ人づくり未来プラン検討委員会 専門委員  
 浜松市教育委員会 はままつの教育推進会議 専門委員  
 浜松市教育委員会 浜松市就学支援委員会 委員  
 浜松市教育委員会 浜松市不登校児支援協議会 会長  
 浜松市教育委員会 浜松市不登校児支援協議会「適応指導教室」スーパーバイザー  
 浜松市社会福祉協議会 事務事業評価 外部評価委員会 委員  
 浜松市社会福祉協議会 浜松市福祉人材バンク運営委員会 委員  
 浜松市社会福祉協議会 日常生活自立支援事業契約締結審査会 委員  
 浜松市発達医療総合福祉センター苦情解決第三者委員会 委員  
 浜松市子ども・若者支援スーパーバイザー  
 平成27年度浜松市障害者虐待防止対策支援事業 アドバイザー  
 浜松市営住宅管理運営委員会 委員  
 浜松市社会福祉協議会 委員  
 浜松市ユニバーサルデザイン審議会 委員  
 浜松市青少年育成センター 平成27年度若者支援スーパーバイザー  
 浜松市支援者支援事業連絡会 スーパーバイザー  
 磐田市障害者施策推進協議会 委員  
 社会福祉法人十字の園 第三者委員  
 社会福祉法人七恵会 介護・医療連携推進会議 構成委員  
 社会福祉法人七恵会 第三長上苑運営推進会議 委員

社会福祉法人復泉会 第三者委員  
 社会福祉法人慶成会 グループホーム花みずき運営推進会議 委員  
 浜松言友会(ボランティア団体)会長  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団 聖隷厚生園 第三者委員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団 聖隷三方原病院 倫理委員会 外部委員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団 特別養護老人ホーム和合愛光園初生サテライト運営推進会議 委員等

## 研究支援実施状況(2015年度)

独立行政法人労働者健康安全機構 浜松労災病院 看護部研究指導・講義  
 医療法人社団種光会 朝山病院看護研究 指導・講評  
 社会福祉法人愛光会 ハロー保育園での実践研究 アドバイザー  
 第20回静岡県理学療法士学会 座長  
 浜松市根洗学園 療育研究「療育と専門的連携」講師  
 磐田市立総合病院 看護研究指導  
 社会福祉法人小羊学園 2015年度研究発表会 外部審査委員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団厚生園 第9回聖隷厚生園学会 研究発表会審査員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団厚生園 第14回聖隷福祉学会 審査員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団 浜名湖エデンの園園内学会 研究発表会審査員  
 社会福祉法人聖隷福祉事業団 聖隷保育学会中間報告会・聖隷保育学会 講師等

講師の派遣依頼は、保健福祉実践開発研究センターホームページの専用フォームをご利用ください。

大学ホームページ

<http://www.seirei.ac.jp/>

社会との連携

保健福祉実践開発研究センター

講師・委員等の派遣

## 2016年度 公開講座のご案内

主に一般の方向けの講座を「市民公開講座」、主に専門職者向けの講座を「公開セミナー」として開催しています。詳細は大学ホームページに順次掲載します。インターネットから、またはFAXでお申し込みください。多くの皆様方のご参加をお待ちしております。

### 公開セミナー

#### ① モチベーションアップに関する講座

タイトル	働くモチベーションを生み出すチームづくり ～仕事上手は「ほめニュケーション上手」～
日時	2016年6月25日(土) 13:30～15:30
講師	本学看護学部 助教 高橋 佐和子、助教 伊藤 純子
対象	保健・医療・福祉の専門職および一般の方
定員	60名
場所	聖隷クリストファー大学

#### ② 障がい者の就労支援に関する講座

タイトル	障がい者の就労継続支援
日時	2016年10月29日(土) 13:00～15:00
講師	加藤 陽一氏 (障害者就業・生活支援センター だんだんセンター長) 小倉 将数氏 (オールしずおかベストコミュニティ障害者雇用推進コーディネーター) ほか
対象	主に保健・医療・福祉の専門職の方
定員	50名
場所	浜松市地域情報センター (浜松市中区)

### 市民公開講座

#### ① 認知症に関する講座

タイトル	超高齢社会を乗り越えるためのケアのあり方 ～より豊かな生活を支えるために～ (上映会を含む講演会)
日時	2016年7月23日(土) 13:00～16:00
講師	本学社会福祉学部 教授 古川 和稔 関口 祐加氏 (映画監督)
対象	市民 (一般市民、介護従事者、近隣施設利用者等)
定員	100名
場所	聖隷クリストファー大学

#### ② 障がい児に関する講座

タイトル	障がいのある子どもの育ちの実際 (仮)
日時	2016年11月19日(土) 13:30～15:30
講師	水戸川 真由美氏 (日本ダウン症協会理事)
対象	市民 (障がいのあるお子さんの保護者を含む)
定員	100名
場所	聖隷クリストファー大学

インターネットからの参加申込み

FAXからの参加申込み

大学ホームページ ▶ 社会との連携 ▶ 保健福祉実践開発研究センター ▶ 公開セミナー・市民公開講座

<http://www.seirei.ac.jp/>

**FAX:053-439-1406**

画面の案内に従って必要情報を入力後、送信してください。

氏名(フリガナ)・住所・電話番号・FAX番号・職業(勤務先)・申込講座名をお知らせください。

## 2016年度 地域貢献事業研究費 採択一覧

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2016年度は、2016年2月に公募、4月に審査を行い、4件が採択されました。

区分A 地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

区分B 地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

区分	研究課題名	研究代表者(所属)	対象地域
A	ベッドサイドの環境デザインの改善 ～患者の入院生活の質を高める廊下の距離表示作成～	炭谷正太郎(看護)	総合病院聖隷三方原病院 高度救命救急センター
	小学生を想定したわかりやすいDET (Disability Equality Training: 障害平等研修)のプログラム開発	田島明子(リハOT)	浜松市
B	自治体と連携した危機管理体制の構築 ～災害時に住民同士が救護活動を主体的に行っていくための地域づくり～	若杉早苗(看護)	牧之原市
	部活動を実施する高校生の心と身体を支えるサポート体制の構築に関する研究	金原一宏(リハPT)	浜松市、豊橋市

所属：看護＝看護学部、リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、OT＝作業療法学科

### 【地域と歩む】保健福祉実践開発研究センター ニュースレター 第8号

発行 聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL:053-439-1400 FAX:053-439-1406 Eメール:health-science@seirei.ac.jp

公開セミナー

笑認力

承認欲求  
動機づけ

チーム  
ビルディング

組織を変える  
小さな  
ステップ

「仕事上手は「ほめニユケーション上手」

# 働くモチベーションを 生み出す チームづくり

受講  
無料

肩のこらない楽しいワークを通して、  
チームビルディングを学びます。

開催日 2016年6月25日(土)  
13:30~15:30

講師 高橋 佐和子 氏 (写真右)  
伊藤 純子 氏 (写真左)  
(聖隷クリストファー大学看護学部助教)



会場 聖隷クリストファー大学  
1号館 1222・1223演習室

対象 主に保健・医療・福祉の専門職の方

定員 60名

楽しい健康づくりの講座を広めようと、2011年より「おもしろ健康教育研究所（通称：おもけん）」としてユニットを結成。これまで講演を実施した学校や企業などは、述べ100施設以上、10,000人を超えました。

私達の活動の特徴は、聴き手に「正しいこと」を押し付けないこと。「わかっているけど行動には移せない」「退屈でむずかしい話は聞きたくない」という気持ちの共有から講演がスタートします。

申込  
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ (<http://www.seirei.ac.jp/>) → 公開講座から
- FAXの場合 ……………聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター [053-439-1406] まで (裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込  
締切 6/10(金)

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

<http://www.seirei.ac.jp>

看護学部 / 社会福祉学部 / リハビリテーション学部 / 助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科 / リハビリテーション科学研究科 / 社会福祉学研究科

交通のご案内

●バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気質・三ヶ日行」乗車  
「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

●お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用下さい。

主催：聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター  
共催：聖隷クリストファー大学社会福祉学部介護福祉学科  
聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校

市民公開講座

後援：浜松市

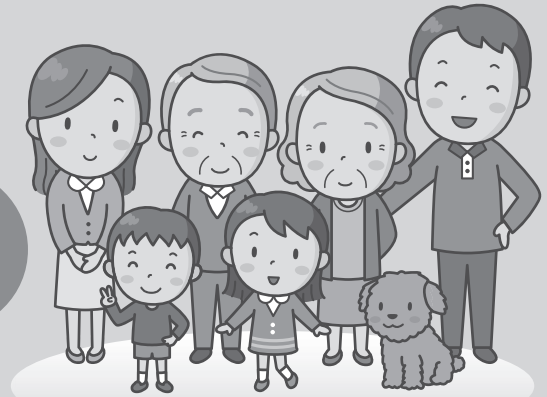
# 超高齢社会を乗り越えるための ケアのあり方

～より豊かな生活を支えるために～

開催日

2016年 **7月23日** 土  
13:00～16:00

受講  
無料



会場

聖隷クリストファー大学1号館7階 1701大教室

対象

一般市民 募集定員:100名

講演 高齢社会で求められる介護福祉実践 世界が注目する最新の自立支援介護

第1部



講師

聖隷クリストファー大学社会福祉学部介護福祉学科教授

ふるかわ かずとし

古川 和稔 氏

茨城県出身。20歳から27歳までの約8年間、プロのお笑い芸人としてコンビ漫才やパフォーマンス集団「電撃ネットワーク」に所属。芸能活動引退後、高齢者福祉施設に勤務。介護福祉士となり、その後、働きながら理学療法士の資格取得。訪問リハビリテーションに従事した後、宇都宮短期大学准教授を経て現在に至る。介護福祉のプロフェッショナル育成と自立支援介護の啓発に情熱を注ぐ熱血先生。

上映会 毎日がアルツハイマー2 (50分/2014年/©NY GALS FILMS)

講演 認知症とともに生きる 認知症ケアを通して学ぶ人生哲学

第2部



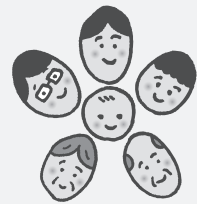
撮影：堂本ひまり

講師

映画監督

せきぐち ゆか  
関口 祐加 氏

日本で大学卒業後、オーストラリアに渡る。在豪29年となった2010年1月、母の介護をしようとして決意し、帰国。2009年より母との日々の様子を映像に収め、YouTubeに投稿を始める。2012年、それらをまとめたものを長編動画「毎日がアルツハイマー」として発表。抱腹絶倒の介護の日々が驚きと共感を持って迎えられ、反響を呼ぶ。2014年、続編となる「毎日がアルツハイマー2 関口監督、イギリスへ行く編」を公開。現在に至るまで「毎アル」シリーズは日本全国で上映会が開催されている。現在、シリーズ完結編となる「毎日がアルツハイマーザ・ファイナル」を製作中。



申込  
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ [http://www.seirei.ac.jp/] → 公開講座から
- FAXの場合 ……聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター (053-439-1406) まで  
(裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込  
締切

7/8金

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

http://www.seirei.ac.jp

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究所/社会福祉学研究科

交通のご案内

●バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車  
「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

●お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用下さい。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター主催

共催：NPO法人えんしゅう生活支援net  
後援：浜松市、浜松商工会議所、教育委員会

公開セミナー

# シンポジウム 障がい者の 就労継続支援

受講  
無料

企業と福祉の立場の支援者からの視点で「働き続けること」を考える

働き続けることをどのように支援していくのか、  
情報を共有し障がい者の「働き続けたい」を支援する



2016年  
10月29日(土)

13:00~15:00〔受付・開場12:30〕

会場 浜松市地域情報センター  
(浜松市中区中央1丁目12-7)

対象 保健・医療・福祉の専門職の方  
企業の方(人事担当者など)

定員 50名

申込  
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ〔<http://www.seirei.ac.jp/>〕→公開講座から
  - FAXの場合 ……聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター (053-439-1406) まで  
(裏面の申込用紙をご利用ください)
- 氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込  
締切

10/14(金)

※申込締切日以降に受講票を送付  
いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

<http://www.seirei.ac.jp>

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

会場までの  
交通のご案内

浜松市地域情報センター

- ・遠州鉄道西鹿島線電車「遠州病院前」下車、徒歩2分
- ・JR浜松駅徒歩10分

※駐車場はございませんので、公共交通機関でお越しください。

# 市民公開講座

主催 聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター  
後援 浜松市

# 「障がいがある子どもを 育てるということ」

受講  
無料

障がいがあるお子さんを育てられた経験を持つお二人をお招きし、障がいがある子どもを育てることの実際を皆様にご覧いただき、障がいがある方への理解を深めていただく機会といたします。

募集定員：100名

開催日

2016年

11/19 土

13:30~15:30  
(受付・開場13:00)

託児可能  
(上限20名)

会場 聖隷クリストファー大学  
1号館 1701大教室

対象 一般の方

## 講演①



講師 水戸川 真由美氏

(公益財団法人日本ダウン症協会(JDS)理事、社団法人ドゥーラ協会認定 産後ドゥーラ)

### 講師紹介

1男2女の3人の母。32歳の長女は脳性まひがあり、18歳の長男はダウン症がある。子育ての大変さも、そこから得られる喜びも、それぞれの子供によって違い、3人3様の子育てがあると実感している。

## 講演②



講師 入江 礼奈氏

(専門里親、NPO 法人全国おやこ福祉支援センター相談員(看護師)等)

### 講師紹介

養育・専門里親として23年のキャリアを持つ。3男1女の実子と里子を交えての小さな共同体を営んできた。生後4ヶ月で受託した里子は、途中で知的障害があることがわかった。現在中学生の彼は、笑顔が可愛く、彼がいると周りの雰囲気がいつも柔らかく温かくなるという。

## 申込方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ (<http://www.seirei.ac.jp/>) → 公開講座から
- FAXの場合 ……聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター (053-439-1406) まで (裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込締切 11/4 金

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406  
<http://www.seirei.ac.jp>

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

## 交通のご案内

### ●バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車  
「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

### ●お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用下さい。



# 聖隷クリスミア大学 保健福祉実践開発研究センター 地域貢献事業研究報告会

時間：10:00～15:00

場所：1号館2階 1222・1223演習室

2015年度に実施された  
地域貢献事業研究  
6件のポスター報告  
とプレゼンテーション  
を行います！



## ピアノ ミニコンサート

10:40～11:00

11:20～11:40

演奏：店村 真知子 氏（元本学教員）

※スタンプラリーの  
ポイントにもなって  
います。  
ぜひ立ち寄ってね！



研究課題	研究代表者
10:20～ 障害平等研修の実施とその効果	田島 明子 (リハビリテーション学部 准教授)
10:30～ 妊娠中から産後までの継続的支援を 目的とした「プレママひろば」の効果	神崎 江利子 (看護学部 講師)
10:40～ ♪ ミニコンサート ♪	
11:00～ 養護教諭と連携した中学生の 性教育プログラム開発	高橋 佐和子 (看護学部 助教)
11:10～ 二次予防対象事業者における 老年症候群の発生に関連する因子の検討	吉本 好延 (リハビリテーション学部 准教授)
11:20～ ♪ ミニコンサート ♪	
11:40～ 妊娠期からの親子の愛着形成と 虐待予防のための家庭訪問	久保田 君枝 (助産学専攻科 教授)
11:50～ 中山間地・高齢過疎集落の健康課題の 再検討—CBPRを通じた実践と研究	伊藤 純子 (看護学部 助教)

※ポスター展示を見ながら休憩スペースとしてもご利用いただけます。  
お茶・お菓子もご自由にどうぞ！





2016 年度  
地域貢献事業研究 報告書



# ベッドサイドの環境デザインの改善 ～患者の入院生活の質を高める廊下の距離表示作成～

炭谷正太郎\*<sup>1)</sup>、渡邊真智子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>聖隷三方原病院

## 1 研究の背景

病院や自宅において治療に臨む場合、非日常的な環境におかれ、心理的ストレスを受けやすい。入院患者は治療に臨むために非日常的な環境に置かれ、不便な思いをすることがある。もっと患者に生活者の視点から良い環境を提供したい。そんな臨床看護師の思いが発端で2013年4月、看護師や大学の有志を中心に炭谷が代表として「BED Project (ベッドプロジェクト)」を結成した。浜松の保健医療福祉の関係者、産業、研究機関など、様々な業界の専門職者の知を結集し一堂に会してワークショップを開催した結果、116のアイデアを創造した。

本研究は、この116のアイデアの中の廊下のデザイン「楽しい廊下」に着目する。循環器に関わる病棟の廊下には、急性心筋梗塞などの心血管疾患リハビリテーションのために歩行距離を示す表示がある。テープに距離が手書きで表記されているなど簡素なものも多く、主に医療従事者が、患者の歩行距離を確認するために使用される。

本研究では、従来の単なる距離表示から、デザイン分野の学問的な知識を用いてさまざまな課題に取り組む「デザイン思考」を取り入れることで、療養環境の廊下のより合理的、魅力的なデザインを提案する。

## 2 研究目的

デザイン分野の学問的な知識によって課題に取り組む「デザイン思考」を用いて、廊下の距離表示のより合理的なアイデア案を創造する。これにより従来の環境と、患者を始めとする一般的な感覚から見た環境のデザインとの相違点を体系的に捉え、どのような価値が求められているのか明らかにする。

## 3 研究方法

### 1. 研究の対象

ワークショップの対象は看護師3名(高度救命救急センター2名、精神科1名)、産業デザイナー1名、デザイン学部教員1名、デザイン学部の学生2名、計7名。対象者は、縁故法により募集した。

### 2. データの収集方法

2017年2月、距離表示のデザインをより良くすることを目的としたワークショップを行い、心臓リハビリに用いる距離表示のアイデア案を分類した。

ワークショップはブレインストーミングの手法を用いて以下の3段階で実施した。①アイデア案:個人作業によるアイデア案の作成、②プロトタイプ:2人1組によるアイデア案の洗練、③選択:発展ブレスト(3～4名のグループによるアイデアの発展)。

### 3. データの分析方法

ワークショップにより創造されたアイデアを情動の3レベルを用いて分類・マッピングする。分類の方法は、各アイデアが提供するであろう「情動的価値(心を動かす価値)」の属性を検証し、「本能レベル」「行動レベル」「内省レベル」の3軸上にマッピングする(価値分類マッピング)。さらに、バリュエグラフの作成により、アイデア案から上位(高い階層)の目標に遡り、アイデア案に含まれる目標をつなぐことで階層を可視化し、対象者がどのような価値を本テーマ(廊下の距離表示)に求めていたかを明らかにする。

#### 4. 操作的定義

情動の3レベル：認知心理学者ドナルド・A・ノーマンの提唱する情動のレベル分類（本能レベル・行動レベル・内省レベル）。

本能レベル：自発的で生来的な層の価値レベル。外観、見た目。

行動レベル：行動を制御する脳の機能を含む部分。使うことの効用。

内省レベル：熟考する部分の価値レベル。自己イメージ、個人的満足感、想い出。

### 4 研究における倫理的配慮

本研究の分析対象となる、ワークショップにおけるアイデア案について、参加者に事前に研究データとして使用することを口頭にて説明し、一定の考慮期間を置き同意を得た。

聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した。

### 5 結果（地域との連携の成果）

#### 1. 創造されたアイデア

看護師、教員、学生、デザイナーが参加したアイデアワークショップにより、景勝地の写真と距離表示を組み合わせた廊下のアイデア「日本百景」（図1）や、音楽や自然画像とともに看護師が付き添いながら歩行距離や心電図を確認できる電光掲示を備えた廊下「ハートビートストリート」（図2）など22件のアイデアが創造された。

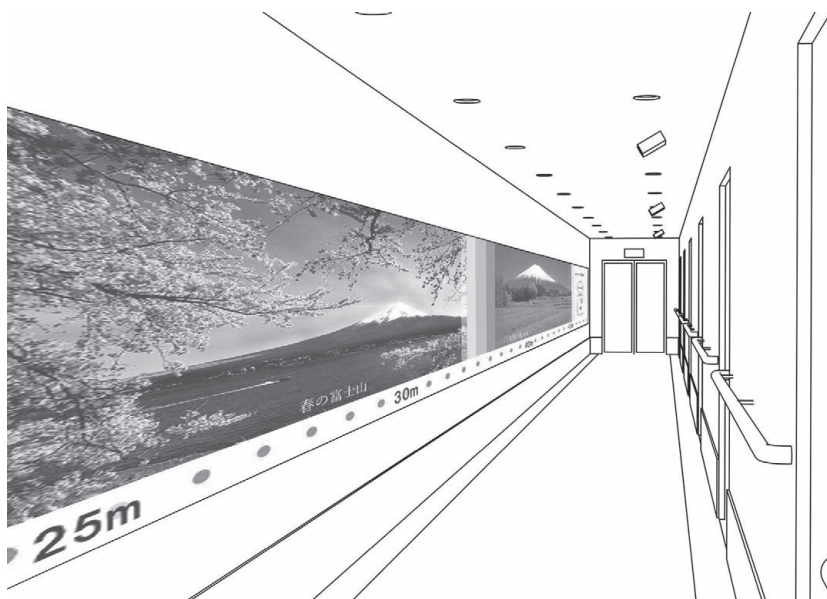


図1. 「日本百景」イメージパース

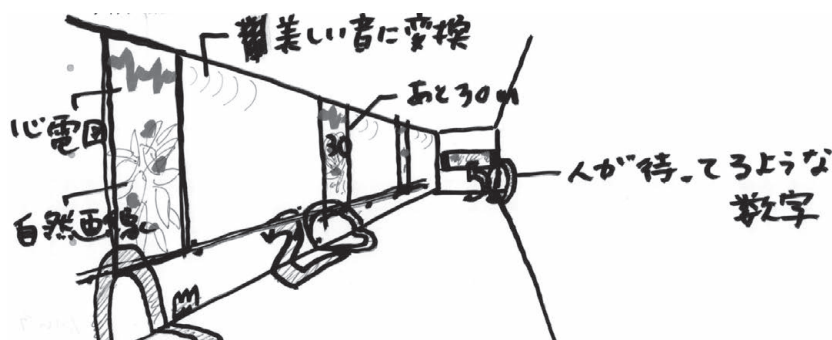


図2. 「ハートビートストリート」アイデア案

## 2. 価値分類マッピング (図 3)

創造されたアイデア案を「情動的価値(心を動かす価値)」の属性を検証し、情動の3レベル「本能レベル」「行動レベル」「内省レベル」を用いて分類・マッピングした。

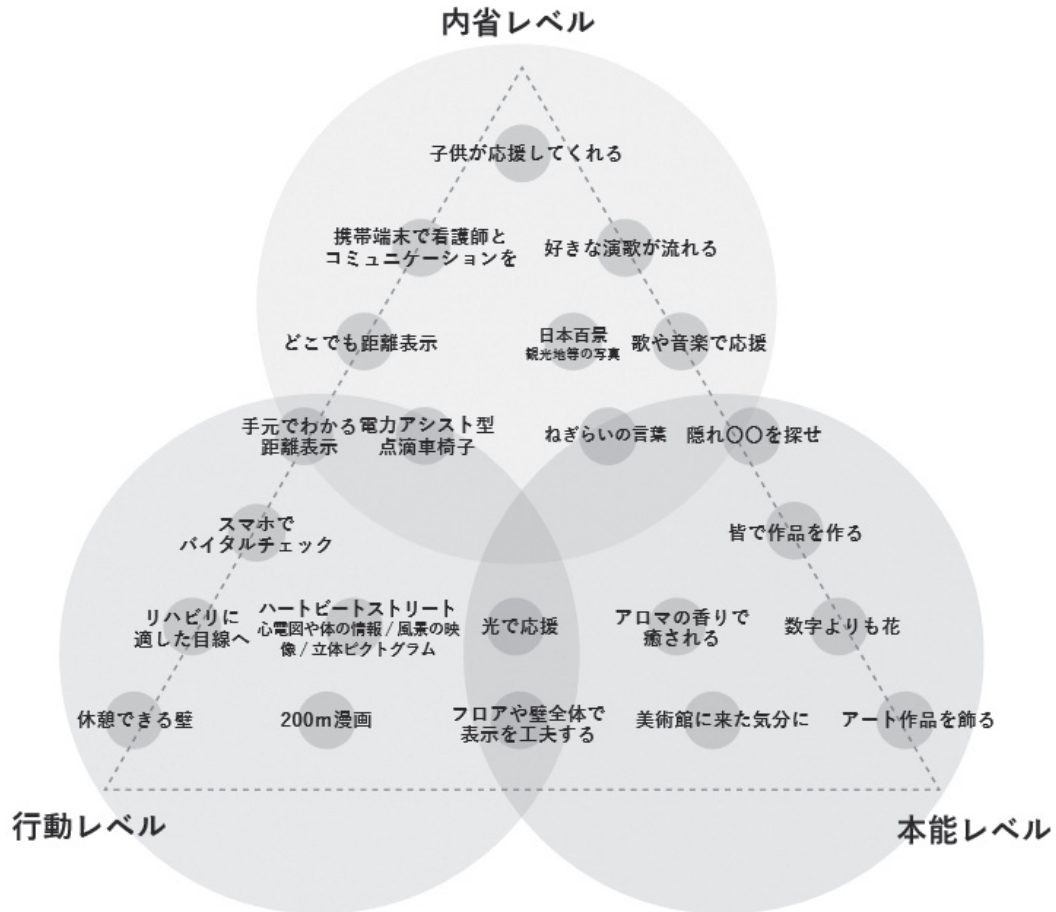


図 3. 価値分類マッピング

## 3. バリュエグラフ

創造されたアイデア案の上位目標をバリュエグラフ上に配置した。

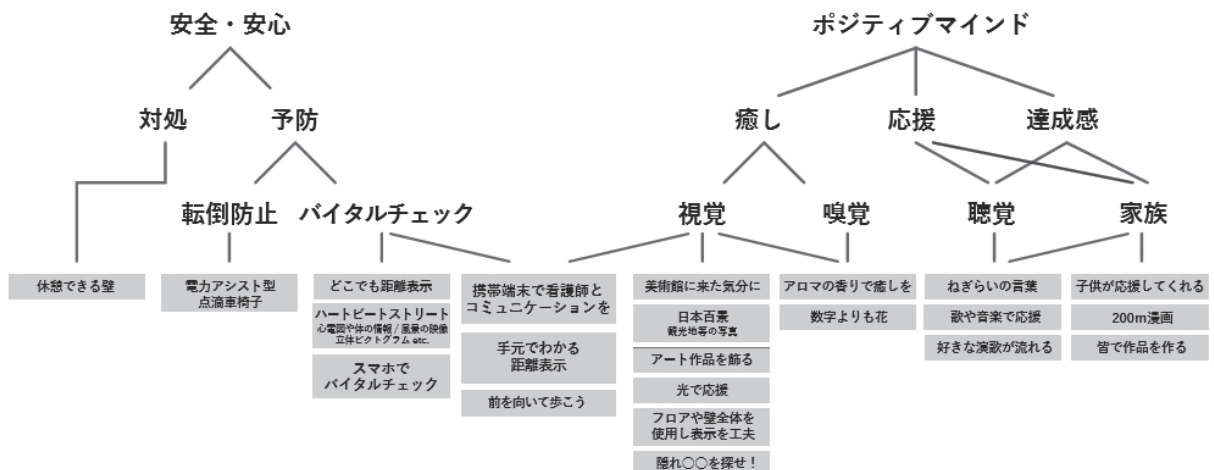


図 4. バリュエグラフ

## 6 考察

心血管疾患リハビリテーションのための歩行距離を示す表示は、従来はテープに距離を示す数字を表記したものが手すりや床に貼られていることが多く、主に医療従事者が患者の歩行距離を確認するために用いられている。すなわち、情動的価値（心を動かす価値）の属性「本能レベル」「行動レベル」「内省レベル」のうち、「使うことの効用」をあらわす「行動レベル」に属するデザインである。そして、病院内の他の環境をみても、従来のデザインは治療のための「行動レベル」のデザインに偏っている。

ブレインストーミングから生まれたアイデア案には、価値分類マッピング（図3）のように、行動的デザインだけでなく、本能的デザインや内省的デザインが備わり、バリューグラフ（図4）の上位目標にあるように、従来の「安全・安心」「対処」「予防」に加え、「ポジティブマインド」「癒し」「応援」「達成感」から成ることが分かった。すなわち、創造されたアイデア案に内在する価値は、患者の生活者としてのニーズを基に醸成されていると考えられる。

入院中の患者は、治療することが優先される環境下で、多くの「不便・不快」な思いをしている。写真にあるイメージパースやアイデア案はいわばコンセプトデザインであり、廊下の他の用途を考慮すると非現実的な側面も否めない。しかし、このアイデア案の要素にある「患者の視界に距離と景色を表示する」ことは、治療上必要な心臓リハビリを実施するうえで、歩行距離の視認性が向上し、視覚的に楽しむことができ、入院生活の質の向上につなげることをねらいとしている。今後さらに上位目標を同時に叶えるデザインを検討してゆく必要がある。

デザイン思考とは、実践的かつ創造的な問題解決もしくは解決の創造についての形式的方法であり、将来に得られる結果をより良くすることを目的としており、デザインを行う過程で用いる特有の認知的活動を指す言葉である。つまり、デザイン思考を用いることによって、様々な療養環境におけるニーズに合わせて、より合理的に環境をデザインすることが可能となる。ここでいう合理的な環境とは、単に医療従事者の目的を果たすための理に適ったデザインではない。患者の生活者の視点からみた合理、すなわち患者自身が「癒し」「励まし」「達成感」を感じることが叶ってこそ、合理的なデザインといえる。

今回、廊下の距離表示に絞ってアイデアワークショップを展開したが、他の病院内の環境においても、デザイン思考を活用し患者中心のデザインを構築してゆく意義を訴えかける結果であった。

## 7 結論

1. 心血管疾患リハビリテーションのための廊下の距離表示について創造されたアイデア案は、使うことの効用に配慮された「行動レベル」のデザインだけでなく、外観に配慮された「本能レベル」と、満足感に配慮された「内省レベル」のデザインが備わっていた。
2. 創造されたアイデア案は「安全・安心」「対処」「予防」「ポジティブマインド」「癒し」「応援」「達成感」の上位目標から構成され、これらの目標から導かれる価値を、廊下の距離表示のデザインに求めている。

# 小学生（高学年）を想定したわかりやすい DET (Disability Equality Training : 障害平等研修) のプログラム開発

田島明子<sup>\*1)</sup>、中谷高久<sup>2)</sup>、楠目昌弘<sup>3)</sup>、高橋祥二<sup>4)</sup>、笠原賢二<sup>5)</sup>、大川速巳<sup>6)</sup>

1) 聖隷クリストファー大学、2) 浜松市社会福祉協議会、3) 障害平等研修フォーラム

4) 浜松市教育委員会、5) CIL コネクト、6) 静岡県障がい者自立生活センター

## 1 はじめに

現在、浜松市社会福祉協議会では自主事業で福祉出前講座を実施している。具体的には、車いす体験、高齢者体験、視覚及び聴覚障害体験、障害のある方のお話、手話・点字教室等を行っている。2016年度は、学校が49回、地区社協が20回、その他が8回、合計77回実施しており、特に義務教育での障害理解の啓発活動に大きな役割を担うものである。

一方、2015年度の地域貢献事業研究費において、代表者は浜松市内での障害平等研修 (Disability Equality Training、以下 DET とする) を実施した。DET はイギリスで誕生したが、「障害とは何か」について、「医学モデル」ではなく「障害の社会モデル」的に理解をするための研修であり、障害当事者がファシリテーターになり、研修受講者と対話を行いながら、発見を促してゆく手法がとられている。「障害の社会モデル」では、障害を障害のある人の身体に帰属させるのではなく、障害から生じる不便は少数派に対する社会の側の無配慮から生じることを多数派である障害のない人たちがしっかりと認識し、解消に努めるべきという考え方を持つ。一昨年日本でも批准した障害者権利条約、2016年4月から施行される障害者差別解消法において「障害の社会モデル」は基本的な障害概念となっている。

上述した福祉出前講座であるが、障害を持つ人の経験を疑似体験し、サポート技術を改善することを目的とした内容となっている。DET は、サポート技術の前提にある、障害をどのようにとらえるか、について学習できる内容であるため、1回の出前講座のなかで双方を組み合わせることで、障害のとらえ方、障害に対するサポート技術を一体化して学習でき、より有意義な啓発活動の機会になるのではないかと考える。しかし DET は、一般成人向けに研修内容が組まれているため、福祉出前講座が主に対象としている小学生にとってはより良い理解が困難な可能性もある。

そこで本研究では、来年度以降の福祉出前講座で実際に使用可能な、小学生（高学年）でも理解しやすいような DET のプログラム開発を行うことを目的とした。

## 2 方法

次の手順にてプログラム開発とその検討を行った。1) DET 実施、2) プログラム検討、3) 検討したプログラム内容にて小学生（高学年）向けに実施し、その結果を基にした再検討、である。1) については共同研究者のなかでも DET がどのような研修かを知らない人がいたため、共同研究者のすべてが DET を経験できるようにした。2) については、その後、小学生（高学年）を対象とし、福祉出前講座の機会を用いて実施するにあたってのプログラム内容の検討を行った。また、DET ファシリテーターを行い小学生（高学年）向けに DET を行った経験のある A 氏にインタビュー調査を行い、その結果をプログラム検討会議にて共有した。3) については、検討したプログラム内容を小学生（高学年）対象に実施し、小学生（高学年）から得られた反応を基に、今後の課題について整理を行った。

### 3 結果

#### 1. DET 実施

場所は、浜松市福祉交流センター2階大会議室、日時は、2017年1月16日13時30分から16時30分まで実施した。ファシリテーターは、共同研究者である楠目が中心となり、笠原、大川がサポートをするかたちで行われた。参加人数は14名であり、そのなかには、共同研究者のなかで DET が未経験であった高橋が含まれた。周知は中谷が主に行っており、参加者はすべて障害者支援を仕事にしている人であった。

#### 2. プログラム検討

##### (1) プログラム検討会議

会議実施は以下のとおりであった。

回数	実施日	場所	内容
第1回	2016年12月16日	浜松市福祉交流センター	以下の内容にて実施した。 ・今後のスケジュール確認 2016年1月16日 DET 実施 その後第2回会議にてプログラム検討 2017年3月に、検討したプログラムにて小学生向け DET を実施する本研究について報告書作成をする ・福祉出前講座についての説明 ・DET についての説明 ・意見交換
DET 実施 (2017年1月16日)			
第2回	2017年1月16日	浜松市福祉交流センター	DET の参加・見学を受け、小学生向けに行う際に配慮が必要な点について意見交換を行った。以下のような意見があがった。 ・時間：90分程度がよい ・内容：アニメーション・絵を使うなど理解しやすい内容にする、障害当事者の差別体験談を盛り込む ・規模：クラス単位を想定
第3回	2017年2月9日	浜松市福祉交流センター	A 氏の参加もあった。 各自が教材・構成について考えてきたことを報告し、田島より A 氏へのインタビュー調査結果を報告した。それらを基に小学生向け DET の内容の整理を行った。
第4回	2017年3月9日	浜松市福祉交流センター	中谷が前回会議で整理した DET の内容を PPT にまとめてきたものについて、不足や変更が必要な個所等についての最終的な確認を行った。
小学生向け DET 実施 (2017年3月20日)、その後振り返り			



## (2) A氏インタビュー結果

2017年1月29日、14時から15時30分まで、都内喫茶店にてインタビューを実施した。インタビューに際して、小学生向けにDETを行った経緯、内容、配慮した点について聴取した。結果のポイントとなる部分は以下のような点であった。

### 【経緯】

A県において、人権教育のモデル校にA区のなかの近所の学校が選ばれた。それを区社会福祉協議会がつないでくれて、2016年度と2015年度に、5年生対象に実施した。

### 【教材】

教材は大人向けと同じものを使った。それに加え、障害を持った人が社会に出た際に困ったことを再現した短いビデオを何本か使用した。

### 【内容】

学校の先生より、障害者の差別が何かを教えてほしいという要望があったため、その要望に応じる内容を加えた。

### 【方法】

- ①「障害って何だろう」という質問に対して、紙に書いてもらった。
- ②車椅子に乗っている人の絵を用い、どこに障害があるかをたずねた。車椅子ユーザーの人にもDETに参加をしてもらい、具体的な経験を話してもらった。
- ③障害を持った人が社会に出た際に困ったことを再現した短いビデオを何本か見てもらった。また、車椅子ユーザーの人に「こういう経験ありますか」と聞くと「この間20分間エレベーターの前で待ちました」という話が語られたので「みんな、これってどうすればいいのかな」と投げかけ小学生に話し合ってもらった。
- ④もう一度「障害って何だろう」という質問をし、紙に書いてもらった。最後に、障害に対する見方の変化を確認し、社会や環境が変わることの大切さを確認した。

### 【時間】

40分を2回行ったが、その間に休憩を入れたので、全部で100分程度だった。

### 【場所・人数・グループ構成】

体育館で実施した。対象は5年生であり、80～90人いた。4人で1グループとなり、話し合うときにはグループで話し合ってもらった。

### 【話しかける時の工夫】

- ・大人と変わらなかった。ただ、具体的な事例をいたるところに入れ込むことや、当事者の人に具体的な経験について話をしてもらうよう配慮した。
- ・反省として、今回は、車いすユーザーの人しか参加してもらえなかったのが、視覚障害者や聴覚障害者など、様々な障害を持つ人に来てもらい、自身の経験を語ってもらうとよいと思った。
- ・いろいろな教材があるとよいと思った。
- ・簡単な言葉を使う。ただし、内容まで変えないように気を付けた。
- ・子どもたちの話し合いのために多くの時間を作れるよう心がけた。

### 3. 小学生向け DET 実施結果

#### (1) 従来型の DET と小学生向け DET の違い

以下に、従来型の DET と今回小学生向けに考案した DET の違いを以下に示す。

	従来型の DET	小学生向け DET
時間	3 時間	90 分
内容構成	①参加者に「障害とは何か」を訊ねる	→実施
	②車いすに乗る男性の絵（図1）を見てどこに障害があるかを考え、答えてもらう	→実施
	③健常者が少数派で障害者が多数派になった仮想社会（12 場面ある）についてのビデオ上映	→内容の理解が難しく、時間も要するため、障害を持つ人が社会に出た際に困った経験を絵で示したもの、短いビデオで示したものを提示
	④箱に星形のものを入れる際どのように入れるかを考え、答えてもらう	→実施
	⑤終了時にも「障害とは何か」を訪ね、最初との変化を参加者で共有する	→実施

#### (2) 小学生向け DET 実施結果

場所は、浜松市福祉交流センター2階大会議室、日時は、2017年3月20日13時から14時30分まで実施した。ファシリテーターは、共同研究者である笠原、大川が中心となり、楠目がサポートをするかたちで行われた。当初は小学生（高学年）ということで4年生から6年生を対象にしていたが、兄弟で参加したいとのことで低学年生（1～3年生）と高校生の参加希望もあったため、参加を認めた。参加者は16名であったがそのうち低学年生は6名、高校生は1名であった。3グループに編成したが、低学年生のそばには高学年生やファシリテーターが常時いるよう配慮を行った。周知は新聞広告や知人の紹介などにより行った。以下、開始前と終了時の障害に対する捉え方の変化を示す。

参加者 No	開始時	終了時
1	ふつうのことができない	社会が優先しなければいけない存在
2	ケガをしてしまって、目などが不自由な人	まわりの人で支え合ったり、助けたりしていくもの
3	日常生活の妨げになるもの	障害者本人だけの問題ではないこと
4	めんどろな事	とりのぞけるもの
5	けががもと	みじか
6	自分ではできないこと	ほかの人とちがうこと
7	ほかの人と同じことができない	したいことがうまくできないこと
8	病気やけが	したいことが自由にできないこと
9	耳の聞こえない人や目の見えない人	エレベーターで車いすがのりたくてもエレベーターの中は人がいっぱい、ちがう階に行きたいのに行けない。のろうとしてもうしろにいた人たちがどんだんぬかしていってしまうこと

10	体が不自由な人	くるしんでいる人、やりたいことができない人、やりたいことが思いどおりにできない人
11	体のどこかが動かなくなる。 体を自由に動かせない	自分のやりたいことができない。そのせいでとても困ることにでくわすことがふえる
12	びょうき、けが	思うようにいかない、たいへんな人、びょうきやけが
13	目がふじゆうな人	やりたいことができない人
14	手や足、目、耳がふじゆうの人	みんなと同じようにできない、ケガでなにもできない
15	いやなこと	いやなこと
16	ふつうの人とおなじ生活ができなくなっていること	目がふじゆうだったり、足がうごかなかったり、ふつうの生活ができなくなったりすること

#### 4. 考察

小学生向けの DET プログラムを検討し実施したが、実施後の振り返りでは、ファシリテーターより、小学生にわかりやすく伝えることの難しさ、初めて会った小学生たちに打ち解けて話すことの難しさ等が語られた。見学した共同研究者からは、小学生に対しての配慮として、わかりやすい言葉を心がける、理解しているか確認をしながら進行する、小学生が発言しやすい方法や環境の工夫が必要との意見があがった。今回は、参加希望を地域から募る形態をとったが、学校で行った場合の反応の確認、学校教師への人権教育の必要性についても意見がなされた。また、今回使用した教材のほとんどは障害平等研修フォーラムに著作権があるものであったため、今後、福祉出前講座で用いる教材については、浜松の地域性を盛り込んだオリジナルな教材を開発していく必要性が確認された。内容については、開始時と終了時の障害の捉え方の変化を見ると、障害は障害を持つ人にとっての個人的な問題でなく、社会や環境しだいで変わるものであるという認識に変化していたのは16名中4名(25%)であった。障害を自分の事として捉える経験のできるさらなる教材開発の工夫も課題である。

# 自治体と連携した危機管理体制の構築

## —災害時に住民同士が救護活動を主体的に行っていくための地域づくり—

若杉早苗<sup>1)</sup>、古川馨子<sup>2)</sup>、山口舞<sup>2)</sup>、鈴木郁美<sup>2)</sup>、池山敦<sup>3)</sup>

鈴木知代<sup>1)</sup>、仲村秀子<sup>1)</sup>、伊藤純子<sup>1)</sup>、川村佐和子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>牧之原市役所健康づくり課、<sup>3)</sup>皇學館大学

### 1 研究の背景

大規模な自然災害（地震、水害、津波など）や、放射線災害など従来になかった災害の発生により、自治体は平時のような厳格な組織体制を保つことができない事態に陥る場合も生じている。このような事態が起こると自治体職員を中心とした被災者救護活動では第一次救命が間に合わないため、住民自らの救護活動が基本となり、2015年3月に発生した震度6レベルの大地震で死者がゼロであった「白馬村の奇跡」のように、住民同士の繋がりが深いことで、迅速な被害者救助をおこなう事が可能であることが明らかになっている。

しかし都市化が進む地域では、近年の家族構造の変化や、近隣の繋がりの希薄化が課題であり、災害時における支援体制の脆弱化も含め、平時から対策を講じていく必要がある。

そこで本研究では、大規模な自然災害発生時に、減災対策のための地域づくりを住民同士が救護活動を主体的に行っていくためにどのようなことが必要であるか、住民自ら災害発生時の支援活動について自分たち自身で考え、見出し、関係者とともに共同していくことができるのかの方向性を探るとともに、今回の研究・調査活動そのものが、住民自身の減災対策の契機となることを配慮して計画した。

### 2 研究目的

以下の2点を明らかにすることを目的とする。

- ①地域のセルフケア(自助)能力やソーシャルキャピタル(共助)を高め、大規模災害発生時の住民と行政(公助)が共同した減災活動をおこなうための方法を明らかにする。
- ②保健師が行う減災対策のための地域づくり活動の方向性を検討する。

### 3 研究方法

#### 1. 調査の方法

第1段階として、大規模災害発生時の「危機課題を再認識する」ために、東日本大震災で津波と福島第一原子力発電所の事故の医療救護活動を実践した、南相馬市立総合病院に勤務していた太田圭祐医師の災害医療講演会を行った。講演では、東日本大震災の避難所と救護所での実践活動の調査・研究報告(聖隷クリストファー大学 若杉研究班)並びに、牧之原市の医療救護体制の現状について、牧之原市の古川馨子保健師がおこない、住民自身が自ら考えるための情報提供をおこなった。さらに、講演会では住民自身が現在実施している「地震対策の準備状況」についてのアンケート調査を実施した。

第2段階として、牧之原市内の自主的な救護活動の核となる住民組織団体(消防団、自主防災組織、日赤奉仕団、災害ボランティア等)のうち、研究協力の内諾を得た者15名程度を対象に大規模な自然災害発生時に「住民同士が主体的に救護活動をおこなっていくための地域づくり」について、問題発見のための双方向のグループ学修(以下、ワークショップ)をおこない、住民相互が気づきや考えを深める場(減災対策井戸端会議)を設けた。

## 2. 対象

本研究では、牧之原市に居住する成人の方で、調査協力への理解と同意が得られた方を対象とした。対象地域は、地震被害に加え、福島第一原発の事故並びに津波被害が起きた東日本大震災の多重災害と同様の被害が想定されている牧之原市を対象とする。牧之原市は浜岡原子力発電所が 20 キロ圏内にあり、静波海岸、相良海岸など、海拔 5 m 以下に多くの居住地区を有している。

## 3. 研究期間

2016 年 5 月から 2017 年 3 月

## 4. 倫理的配慮

聖隷クリストファー大学倫理委員会で承認を得た方法 (No.16063) を遵守し実施した。

# 4 結果

### 第1研究：災害医療講演会 (図1)

- 1) 演題：東日本大震災直後の混乱期に行った救命医療の実際  
～津波・原発災害と闘った南相馬の 10 日間～  
講師：安城厚生病院 (元南相馬市立総合病院) 太田圭祐医師

- 2) 講演会参加者を対象に地震対策の準備状況について  
住民へのアンケート調査

牧之原市で開催した「災害医療講演会」の参加者 136 名のうち 120 名 (回収率 88.2%) の回答を得た。調査内容 (表1) として、「講演会の内容理解」「大震災に備えた対策や準備状況」「市で作成した津波・水害のハザード・マップの活用」「市の医療救護体制の活用」「市の医療救護活動に対する不安 (自由記載)」について回答を求めた。



図1 災害医療講演会の様子

表1 地震の準備状況アンケート N=120

項目	内容	人	(%)
年代	20 歳代	5	(4.2)
	30 歳代	7	(5.8)
	40 歳代	5	(4.2)
	50 歳代	26	(21.7)
	60 歳以上	57	(47.5)
	未記入	20	(16.7)
講演会の内容理解	十分理解できた	18	(15.0)
	ある程度理解できた	81	(67.5)
	未記入	21	(17.5)
大震災に備えた対策や準備をしていますか	はい	81	(67.5)
	いいえ	18	(15.0)
	未記入	21	(17.5)
大震災の備えとしてどのような対策をしていますか (複数回答)	食料	61	(75.3)
	飲料水の備蓄	67	(82.7)
	着替え	29	(35.8)

大震災の備えとしてどのような対策をしていますか (複数回答) N=81	防災グッズ	45	(55.5)
	災害用トイレ	14	(17.3)
	お薬手帳	32	(39.5)
	常備薬	24	(29.6)
	家具の転倒防止	32	(39.5)
	家族の安否確認の打ち合わせ	16	(19.8)
市が作成したハザード・マップは活用できると思いますか	活用できる	19	(15.8)
	ある程度活用できる	55	(45.8)
	活用の仕方がわからない	10	(8.3)
	活用できない	10	(8.3)
	その他・未記入	26	(21.6)
市の医療救護所は活用できると思いますか	活用できる	7	(5.8)
	ある程度活用できる	46	(38.3)
	活用の仕方がわからない	17	(14.2)
	活用できない	9	(7.5)
	その他・未記入	41	(34.2)

## 第2研究：減災対策井戸端会議（ワークショップ）

市の協力を得て、減災対策の担い手となる自治会や自主防災組織の役員、日赤奉仕団に所属する市民のうち、減災対策井戸端会議への参加を希望した26名を対象とした。

地域の健康課題発見のための話し合い手法を用いて、皇學館大学助教でワークショップデザイナーの池山敦氏の指導を受け、2017年2月に「減災対策井戸端会議」（表2）を実施した。

表2 減災対策井戸端会議（ワークショップ）

学習プロトコル	内容
①オリエンテーション	趣旨説明、研究協力の同意を得る
②問題提起・導入	「静岡県第4次被害想定」の情報や研究責任者の研究結果報告から、被災発生時に必要な救護活動や避難所の暮らし、健康危機状態のイメージを持つ
③意見交換	グループに分かれ「被災直後の共助の地域活動、地域組織のあるべき姿」を共有する。またその実現に必要な資源、地域づくり活動について意見を出し合う。特に被災直後から10日後頃までの救命活動を中心とする時期から避難所生活を運営するまでの「時間軸」と「危機の発生状況の変化」を意識して話し合いを進める。
④収束・まとめ	出された意見を「付箋紙」を用いて質的に統合する。代表的な2グループをグラフィック化(可視化)し成果を共有する。

## 1) 結果

参加者は、計 26 名(男性 15 名、女性 11 名)であった。スタッフとして牧之原市保健師 3 名、研究者 3 名が従事した。ワークショップは同じ地域ごと 6～8 名の 4 グループに構成し、約 80 分の時間話し合いをおこなった。話し合いは、①大規模な地震が起きたときに何が起きるのか、何をすべきなのか。②地震発生から時間軸に沿っておこなう行動をタイミングと自助・公助・共助の枠組みで考える。③アクシデント・カード(静岡県第 4 次被害想定)の被害状況に対しどのように行動するか。の 3 段階を追って話し合った。

話し合いでは、まずは「自分の命と家族の命を守る行動」を最優先し、次いで、「火事の危険の回避」や「埋もれている近所の人々の救命活動」が挙げられた。しかし、救命活動をしようと思っても、実際は「どうしたらいいかわからないかもしれない」「自分たちもちゃんと避難できるのか」「車で避難すると渋滞が起こる」など状況の不透明さへの不安が聞かれた。また、浜岡原子力発電所の事故の影響について「もう駄目だ」「帰れない」「生活できない」など、東日本大震災の状況をテレビでみたショックを再度振り返りつつ話し合いがなされた。

また、「死んでしまったら仕方がない・・・でも生きていた時どうしよう」という考えから、「生き残ったということは、どうするかを考えていかなければならない」「共助は自分が生きていないとできない」という、地域みんなで考えていくことや地域の繋がりの重要性を確認する話し合いがされた。

地震発生から時間軸に沿っておこなう行動をタイミングと自助・公助・共助の枠組みごとに、アクシデント・カードを追加しながら話し合いをおこなった。参加者は、牧之原市の地理的環境や道路・地盤や地質の盤石さ等の普段から認識している情報を基に、被害が起こりそうな状況を危機感を感じながら討論した。特に東日本大震災以降、居住地域や避難所に指定されている公民館の海拔値を市内の主要施設に掲示するなど公助の取り組みが進められている効果か、一般住民に認識されている実態が確認された。

また自助として、非常持ち出し袋の準備や食料・水の備蓄以外にも、寝床に靴と着替えを準備して寝ているや、窓やドアを開けて寝るなど、過去の震災の教訓から自分にできる危険回避行動を実践していた。共助では、まずは「家族や自分の身の安全」が第一とし、次いで地域の繋がりが深いため、要援護者(高齢者)の救助を意識し「近所の安否確認」「声かけ」をしていくとしながらも、実際「本当にご近所を見る余裕があるのか」「昼間は高齢者だけになってしまうので、連絡を取る手段がないのではないかなど、救助の意欲はあっても実際には難しいのでは、という認識や課題も確認された。

公助に対しては、行政がおこなうガス発電機の補助金や体制整備の不十分さや災害対応の訓練の有効性など、発災直後に必要と感じている事柄が示されると共に行政がおこなっている訓練や取り組みが、発災のどの時期に活用していけるかを市民が意識している実態も確認された。参加者の傾向としては、地震が発災直後は、東日本大震災の報道等の経験もあり沢山の意見が出されていたが、12 時間後、24 時間後と時間軸が経過する程、住民が認識している行動の抽出が少ない結果であった。



図2 話し合いのグラフィック(Aグループ)

## 5 考察及び今後の方向性

本調査の主な目的は、ワークショップを通し、地域のセルフケア(自助)能力やソーシャルキャピタル(共助)を高め、大規模災害発生時の住民と行政(公助)が共同した減災活動をおこなうための方法を明らかにすることと、保健師が行う減災対策のための地域づくり活動の方向性を検討することである。

本調査では、災害医療講演会の感想の多くに、大規模災害の中でも「原子力災害」を原因とした、極限状態の医療現場の実状を知ることができ、話を聞いた住民は、「あたり前のように助けてくれると思っていた行政や病院の機能が、実際に災害が起これると、機能不全状況になる事を初めて知った」「自分達で協力してなんとかするしかないと思った」と危機意識を再認識する機会となっていた。このため、第2研究のワークショップに参加した住民の多くは減災対策を真剣に考える機会となっていた。参加した市民は、市の取組みや主要な公共施設の海拔表示、津波タワーの建設、避難経路の整備など、減災体制の環境整備状況を知っており、平時から市が意識的に自主防災組織や自治会組織を巻きこみ連携・協働してきた効果が確認されたことは本研究の成果といえる。しかし、時間軸で災害対応の行動を考えていくワークショップでは、時間経過が進む程、行動認識に至っていない課題が明らかになった。これは、平時の訓練体系が被災直後の混乱期や急性期を想定した内容が中心であり、フェーズ3亜急性期(1週間から1ヶ月程度)の学習機会や体験が少ない可能性も示唆しているといえよう。実際の震災では、避難所生活から復興住宅・仮設住宅に移行できるまでの期間が一番長く、健康危機も発生しやすいことから、今後の防災訓練などで経験や訓練ができる内容に反映させていく必要があると考える。また、行政保健師がおこなう公衆衛生看護活動の判断や行動は、平時の判断能力やアセスメント能力に基づきおこなわれる(松本ら,2013)ことと同様に、住民の減災活動となる自助・共助の行動も、平時の取組みが基盤となると考える。さらに災害の危機感は、実際に震災を経験した東日本大震災の住民でも時間が経つ程風化していく傾向にあり、危機意識を持続していくことも課題といえる。このため、平時から住民自身が危機意識を持ち、主体的に減災活動に取り組んでいこうとする風土を醸成していくことが重要であると考え。今回のワークショップは、住民自身が危機感を持って意見を交換できる場を設けていくことが、住民の学びと気づきを促す場であるという手応えを得た。以上のことから、本研究は単年度のみの関わりに留まらず、継続して取り組んでいくべき課題であり、住民全体に意識を拡散させていく必要があると考える。本調査の結果は、量的・質的分析を行い、2017年第5回日本公衆衛生学会にて報告予定である。



# 部活動を実施する高校生の心と身体を支えるサポート体制の構築に関する研究

金原一宏<sup>\*1)</sup>、根地嶋誠<sup>1)</sup>、有蘭信一<sup>1)</sup>、吉本好延<sup>1)</sup>、田中真希<sup>1)</sup>、坂本飛鳥<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学

## 1 目的

成長期にある子どもは単に大人を小さくしたものではない。痛みの診断・治療において、高校生ならではの痛みの特徴や診断・治療における注意点がある。特に高校生では心理社会的要因が痛みに大きな影響を与えるが、明らかになっていないことも多く、臨床対応に苦慮している医療者がいる状況である(山下、西須、須見、2014)。

高校生は潜在的な痛みの症状が表に出ないように振る舞う。特に手足に痛みがある高校生は、痛みが出ないような姿勢や歩き方、つまり痛みをかばう代償動作により活動制限をする。表向きには痛みの訴えが隠れていて、臨床では痛みの訴えがないため、痛みの実態が捉えにくい状況となることも多い(西須、2014)。しかし、理学療法士による臨床評価では、専門的視点から痛みや筋力低下による歩き方の不自然さを評価分析し、高校生の痛みの特徴を臨床推論することで痛みの原因を見出す。

また、高校生は、大人よりも恐怖心が痛みの表現に大きく影響する。「恐怖」の表現を大きくして、訴えが痛みの実態と必ずしも一致しないことも、痛みの特徴である。さらに社会的なストレスが痛みを受けた際の痛みの脳関連領域を反応させることもあり、恐怖等のストレスが痛みと関連している。

心身相関の観点からは、精神的ストレスを過剰に感じると不安と共に腹痛を生じたりと、心である脳と身体の間は関連している。すなわち高校生の痛みは、心理的にストレスがあったときに、痛みが出るケースがある。辛さや恐怖を感じて、それが感情的な痛み要素となり痛みを感じる。このように人の痛みの表現は、必ずしも痛みそのものを的確に表すわけではない(須見、2014)。

高校生の部活動においては、痛みでパフォーマンスが低下したり、部活動に集中できないことがある。高校生の痛みが起こる原因は、4つの仮説がある。第1に、未発達の四肢に過度な運動負荷が加わったことで痛みが出るという「疲労説」である。第2に、子どもの成長痛の多くが脚、特に膝周辺に集中することから、O脚やX脚など成長の過程で一過性に現れる下肢のアライメントの異常が関連しているとする「変形説」がある。第3に、成長期における感情面の変化が原因とする「感情説」である。そして、第4の仮説が「筋の痛み説」である。これは骨が急速に成長したときに筋肉の伸びが骨の伸びに追いつかず、筋肉が伸長されることによる痛みが原因とする説である。

これらの仮説の原因は、高校で実際に行われる日々の心と身体のメンテナンスが十分にされていない可能性がある、重要な課題である。高校生において部活動は、心身を鍛える場であり今後の人生に様々な影響を与える。高校生が、心身の痛みを感じずに部活動に励むことができるには、運動器や神経系を熟知した専門家である理学療法士が、ストレッチングや筋力トレーニングの実技指導や痛み学などのプログラムを講演し、適切な方法と量で心身のメンテナンスを日々実施する必要がある。

高校教員からも部活動において痛みにより心身機能が低下し、運動ができない学生が多いという訴えも聞かれる。このような状況で気軽に心身のことが相談できる体制を日頃から整える取り組みが大切である。特に、本学の理学療法士による講義(実技を含む)と身体測定後のアドバイス、そして相談窓口は、高校生の心身機能の向上や医療分野を学ぶ機会となる。さらに講義等の開講を通して、高校生と関わり親睦を深めることは、信頼関係を築く、重要な役割を果たす。

高校生は、医学の知識が少なく、痛みを学ぶ環境がない状況に置かれている。自身の痛みが、なぜ起きているのか、急性疼痛を含め、慢性疼痛について理解を深める必要がある。このような機会を設けることは、高校生のQOL向上につながり、学校生活をより快適にすることにつながる。

今回、部活動を実施している高校生を対象に心と身体を支えるサポート体制の構築を図るため、スポーツ障害による痛みとその対策であるアスレチックリハビリテーションの実践をし、プログラム効果から高校生にどのようなサポートが必要かを明らかにする。

## 2 方法

サポート対象は、本学近隣の地区にある豊橋南高校、野球部に所属する高校生 19 名であった。対象に 2016 年 10 月 3 日：高校生への講義（講義内容：痛み学、スポーツ医学、アスレチックリハビリテーションの実践等）、2016 年 11 月 7 日：身体機能調査（体位前屈、パトリックテスト）、心理評価（NRS：Numerical Rating Scale、PCS：Pain Catastrophizing Scale、HADS：Hospital Anxiety and Depression Scale、PDAS：pain disability assessment scale）を実施した。その後、2 か月間、柔軟性向上プログラムとしてセルフストレッチングを実施した。2017 年 1 月 19 日：再度、身体機能検査、心理検査を実施した。2017 年 2 月 13 日：全体及び個別に結果フィードバックを実施した。

## 3 結果（地域との連携の成果）

身体機能調査である体位前屈は、ストレッチング前後で比較し、ストレッチング前 4.45cm、後 6.79cm で有意差（ $p < 0.05$ ）が認められ、ストレッチング効果があった。パトリックテストは、右股関節、ストレッチング前 21.9cm、後 20.5cm で有意差（ $p < 0.05$ ）が認められ、ストレッチング効果があった。左股関節、ストレッチング前 22.5cm、後 22.4cm で有意差は認められなかった。

心理評価について、NRS 痛み強度：ストレッチング前後で比較し、ストレッチング前 3.6 後 4.8 で有意差（ $p < 0.05$ ）が認められ、2 か月後は痛みが増強した。NRS 痛み不安：ストレッチング前 3.3、後 4.6 で有意差が認められなかった。PCS 総合：ストレッチング前 21.3、後 22.1、PCS 反芻：ストレッチング前 12.6、後 12.0、PCS 無力感：ストレッチング前 5.3、後 5.9、PCS 拡大視：ストレッチング前 3.5、後 4.2 で有意差は認められなかった。HADS：ストレッチング前 6.4、後 7.3、HADS 不安：ストレッチング前 3.9、後 4.4、HADS 抑うつ：ストレッチング前 2.8、後 2.9 で有意差は認められなかった。PDAS：ストレッチング前 5.2、後 4.7 で有意差は認められなかった。

## 4 考察

今回、部活動を実施している高校生を対象に心と身体を支えるサポート体制の構築をするため、予防医学の観点から、柔軟性向上プログラム効果が、高校生の身体機能、心理にどのように影響するか検討した。

身体機能についてストレッチング前後で比較し、体位前屈、右股関節ストレッチングは、有意差（ $p < 0.05$ ）が認められ、ストレッチング効果があった。このことから、今回のサポートが身体機能の柔軟性を向上させた。

心理評価について、NRS 痛み強度では、ストレッチングを 2 か月実施したが痛みが増強した。NRS 痛み不安、PCS 合計、細項目である PCS 反芻、PCS 無力感、PCS 拡大視、HADS、細項目である HADS 不安、HADS 抑うつ、PDAS で有意差は認められなかった。

これらより、身体機能は柔軟性が向上したが、痛み強度は増加した。痛み不安、破局的思考を測定する PCS、不安と抑うつを測定する HADS、痛みにより影響する日常生活動作を測定する PDAS は、有意な差は認められなかった。測定データは、有意差は認められなかったが、痛み不安は若干増加傾向、破局的思考を測定する PCS は合計、無力感、拡大視で増加傾向、反芻のみ減少傾向、不安と抑うつを測定する HADS は不安、抑うつともに増加傾向、痛みにより影響する日常生活動作は、減少傾向であった。身体機能は向上したものの、痛みが増強し、その影響は心理的影響による痛み増強によると考えられた。これは、痛み不安や、PCS の細項目、HADS の負の感情項目で数値が若干高かったことから考えられた。

身体機能の向上は、PDAS の数値が低下したことから、痛みによる ADL 制限は低下傾向を示した可能性があった。痛みは、増強しても、ADL が向上したことは、身体の痛みは、負感情の増強により痛みが増強した。すなわち、痛みによる負の感情は、痛みを増強させる。痛みを感じて不安が生じる際は、痛みの原因を追究することで、原因を知り、その適切な対処方法をつたえることにつながる。

このように痛みは、身体的、感情的な要因が原因となり痛みが増強する。ゆえに両側面から評価し、治療することが重要である。

本学周辺地域の高校生が、心身を鍛える部活動において怪我をし、その後、完治しないケースが多くある。ケガが完治しないままの競技復帰は、選手生命に支障をきたすことがある。このようなケースは、多少の痛みが生じても代償動作等により痛みを回避することで病院へ行かず、症状を悪化させた後、病院へ来ることが多い状況である。そのため、重症となり試合までに回復が間に合わず、悔しさや苛立ちを選手が感じたまま、高校の部活動を終えることもある。すなわち、現在の医療サービスなどの提供だけでは不十分である。大学が地域の高校生の健康を啓発して支えていくことが重要である。

近隣の高校生が、痛みにより部活動実施が困難になる前や困難になった時に、気軽に相談できる体制を地域内で整えておくことは重要である。特に、予防医学を含めた観点から理学療法士による相談窓口は、地域在住の高校生にとって健康増進及び安心を提供するものである。長期的にこの活動を実施することは、地域の高校生に対して重要な役割を果たすと考える。

## 4 結論

---

今回、部活動を実施している高校生を対象に心と身体を支えるサポート体制の構築を図るためには、運動器系・神経系に精通した理学療法士が関わることにより、痛みの身体的側面、感情的側面の両側面からアプローチが必要であると考えられた。これにより高校生は、安全で、安心なパフォーマンスを維持する可能性がある。

2016 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧(所属、職位は 2016 年度時点)

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部 教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	井上 菜穂美	看護学部 助教
委員	落合 克能	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	石津 希代子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

2017 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部 教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	井上 菜穂美	看護学部 准教授
委員	落合 克能	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	石津 希代子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

---

# 保健福祉実践開発研究センター年報 第8号(2016)

2017年11月1日発行

編集 聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

発行 聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL 053-439-1400 FAX 053-439-1406

印刷 日興美術株式会社

---





# 地域と歩む

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and  
Research Center for Health and Welfare